TERATOTERA DOCUMENT 2018

TERATOTERA DOCUMENT 2018

CONTENTS

目次

03 TERATOTERAとは ABOUT TERATOTERA

04 はじめに PREFACE

06 2018年度年間スケジュール 2018 SCHEDULE

08 踊り念仏 DANCING MANTRA

11 駅伝芸術祭 EKIDENART FESTIVAL

19 TERATOTERA祭り2018 TERATOTERA FESTIVAL 2018

46 アーティストプロフィール ARTIST PROFILES

49 テラッコの感想 THE VOICE OF TERACCO

52 アートプロジェクトの0123 INTRODUCTION TO ART PROJECT

56 来場者アンケート VISITOR QUESTIONNAIRE

58 おわりに EPILOGUE

60 クレジット CREDITS

ABOUT TERATOTERA

TERATOTERAとは

TERATOTERA（テラトテラ）は、東京都とアーツカウンシル東京と、吉祥寺に拠点を置いて現在進行形の芸術をフィーチャーしている一般社団法人Ongoingが協働して、平成21年度よりJR中央線高円寺駅〜吉祥寺駅〜国分寺駅区間をメインとした東京・杉並及び武蔵野、多摩地域を舞台に展開する、地域密着型アートプロジェクトおよびその発信機関の総称です。TERATOTERAでは、音楽ライブ、展覧会などのアートプログラムを、年間を通して実施しています。また、アートの現場で活躍する人材の育成に重きを置き、アートプログラムの運営をボランティアスタッフが主導するとともに、アート関係者に向けたさまざまなレクチャーを開講しています。

PREFACE

はじめに

ボランティア集団が主導
TERATOTERAの新たな展開

JR中央線の高円寺・吉祥寺・国分寺という3つの「寺」の駅を繋ぐ周辺地域で展開しているアートプロジェクトTERATOTERA（テラトテラ）。2009年よりスタートした本プロジェクト、2018年度は街なかを舞台にした二つのパフォーマンスイベントと毎年秋の恒例となったアート展の３つのイベントを開催しました。

まずは夏に、阿佐ヶ谷駅周辺で参加者が「イブツ（異物）」と考えるパフォーマンスをおこなった「踊り念仏」から始まり、10月には高円寺駅から西荻窪駅までの区間をアーティストが芸術を実践しながらタスキを渡していく「駅伝芸術祭」なる新企画を開催。翌月には三鷹駅周辺地域の複数の会場を使っての大型展覧会「TERATOTERA祭り2018」を、国内のみならず東南アジアからの招聘作家を含めて開催しました。またこうした街なかでのイベントと併行して、アートプロジェクトの基礎を学ぶことのできるレクチャーも通年実施してきました。

TERATOTERAのすべての企画は、TERACCO（テラッコ）と呼ばれるボランティアスタッフによってその多くが支えられているのですが、今年の大きな特徴として、すべての企画において彼らが中心的な役割を担っていたことです。「踊り念仏」と「駅伝芸術祭」の二つはテラッコ企画として実現したもので、企画アイデアからアーティスト選考、予算決め、当日の運営まですべてTERACCOが責任を持って遂行してくれました。その勢いを加速するように、さらに革新的な動きが今年度TERATOTERAに起こりました。TERACCOの歴代コアメンバーによってTeraccollective（テラッコレクティブ、略称「テラコレ」）が結成されたのです。裏方だけのコレクティブとして、アートにまつわる様々な人や現場を支え盛り上げるという意思の下、初めて手がけるプロジェクトとして臨んだのが「TERATOTERA祭り2018」でした。

本ドキュメントのテキストは、Teraccollectiveをはじめとしたテラッコたちの言葉によって構成されています。読み進んでいくと分かるように、彼らがどのような思いで本活動に関わったのか、それぞれの気持ちがダイレクトに伝わってくる内容となっています。

TERACCOたちの言葉を手掛かりにしながら、東京の西側で新しい挑戦を続けるアートプロジェクト＝TERATOTERAの2018年度の軌跡をじっくりとご覧いただければと思います。

TERATOTERAディレクター
小川希

＊Teraccollectiveの発足にともない、ボランティアスタッフの呼称表記を従来のTERAKKOからTERACCOに変更しました。

TERATOTERA: New Developments of a Volunteer-based Arts Group

The art project TERATOTERA takes its name from the “tera” (meaning “temples,” also read “ji”) of three stations on the JR Chuo Line, where its activities are focused: Koenji, Kichijoji, and Kokubunji. Begun in 2009, TERATOTERA held three events in 2018: two street-based performance events and its annual autumn art exhibition.

The first event, held in the summer, was DANCING MANTRA performed by participants near Asagaya station and designed to engage with the concept of IBUTSU (strange and foreign objects).

In October, a new project titled EKIDENART FESTIVAL was held, involving a relay race between Koenji and Nishi-Ogikubo stations in which a sash was passed from one artist to the next as they made art.

The following month, our annual large-scale exhibition, TERATOTERA Festival 2018, was held at various venues in the Mitaka station area. It included artists invited from not only within Japan but also Southeast Asia. Every year, lectures exploring the basics of these kind of art projects are held concurrently with these events and exhibitions.

While all of TERATOTERA’s projects have been centrally supported by the volunteer staff of TERACCO, this year was special because they were responsible for 100% of the work. DANCING MANTRA and EKIDENART FESTIVAL were both conceived and carried out by the volunteers of TERACCO. They not only came up with the idea, but were also responsible for choosing the participating artists, determining the budget, and managing all activities on the day of the events. These energies further intensified in 2018 with even more innovative programming from TERATOTERA. The original core members of TERACCO have formed the Terraccollective, or “Tera-colle” for short. From behind the scenes, they work with various people related to the arts and to ensure the best experiences at the performance and exhibition sites. TERATOTERA Festival 2018 was the first project they oversaw.

The pamphlet you hold in your hands comprises statements from members of Teraccollective and TERACCO. Upon reading, you will learn how the members came to be involved with and feel about the project, directly through their own words.

With these testimonies as your guide, we hope that you will closely follow what TERATOTERA, an art project in western Tokyo that is always taking up new challenges, accomplished in 2018.

Nozomu Ogawa, Director, TERATOTERA

Note: Upon the founding of Teracollective, the volunteer staff decided to change the spelling of TERAKKO to TERACCO.

SCHEDULE

2018年度年間スケジュール

JUN.2018 - FEB.2019

アートプロジェクトの０１２３（オイッチニーサン）

INTRODUCTION TO ART PROJECT

[開催日時]
2018年6月21日(木) ～ 2019年2月21日(木)
19:30 ～ 21:30
原則隔週木曜日　全18回(特別講座を含む)

[会場]
アーツカウンシル東京
ROOM302 ほか

[コーディネーター]
小川希

[ゲスト]
高嶺格
西野達
山城知佳子
福住廉
小林武史
藪前知子
木野哲也
国松希根太
奈良美智
佐塚真啓
羊屋白玉
矢内原美邦

AUG. 2018

踊り念仏

DANCING MANTRA

[開催日時]
2018年8月18日(土)
17:00 ～ 19:00

[会場]
阿佐ヶ谷駅周辺

[参加アーティスト]
武田力

OCT. 2018

駅伝芸術祭

EKIDENART FESTIVAL

[開催日時]
2018年10月13日(土)
13:00スタート

[会場]
中央線高円寺駅～西荻窪駅沿線地域

[参加アーティスト]
山崎皓司 ＋ 前川遙子
村田峰紀 × 松原東洋
佐塚真啓

NOV. 2018

TERATOTERA祭り2018
Walls-わたしたちを隔てるもの-

TERATOTERA FESTIVAL 2018:
Walls : The Things That Separate Us

[開催日時]
2018年11月16日(金)、17日(土)、18日(日)
11:00 ～ 18:00
※スペースエルベは18:30 まで
※トークショーは20:30まで

[会場]
三鷹駅周辺

[参加アーティスト]
遠藤麻衣
キュンチョメ
小林清乃
地主麻衣子
砂連尾理
高田冬彦
Tuan Mami
林千歩
本間メイ
maadm

踊り念仏　DANCING MANTRA

日時	2018年8月18日(土)17:00 ～ 19:00	Date	2018.8.18 (Sat)
会場	阿佐ヶ谷駅周辺	Venue	Asagaya Station Surrounding Area
参加アーティスト	武田力	Artist	Riki Takeda

「異物」として街を体感する 21世紀の「遊行」武田力『踊り念仏』

「街のイブツ（異物）を演じてください」という指示を受けて、十数人の参加者が街に散っていく――そんなイベント『踊り念仏』が、阿佐ヶ谷駅周辺で行われた。演出家・民俗芸能アーカイバーの武田力が各地の街頭で続けている演劇的なパフォーマンスだ。参加者はそれぞれが思い描く「イブツ」的なふるまいで街を歩き、たたずんだ。夏の夕暮れ、「イブツ」が体感した阿佐ヶ谷の街の様相は――。

IBUTSU Experiences of the City as Foreign Object and 21st Century Holy Wandering

“Please act out the town’s IBUTSU,” referring to a “strange and foreign something.” With those directions, a dozen or so participants dispersed into the streets for the event DANCING MANTRA around Asagaya train station. Theater director and archivist of traditional folk entertainments Riki Takeda has directed similar dramatic performances in various neighborhoods. Participants either walk around or stand in the streets acting out what IBUTSU means to them. How did Asagaya respond to these IBUTSU on that summer evening? See for yourself on the next page.

踊ってみて気づく自分と街との関係性

商店街を裸足で歩く人や二人三脚でもたれあうように進む二人組、たたずんでひたすら店の看板を見つめ続ける人……。多くの人々が行き交う真夏の阿佐ヶ谷の街に、そっとイブツ（異物）たちが出現した。通行人はときおりイブツたちに怪訝なまなざしを向けながらも、足を止めることもなく通り過ぎていく。街を舞台とした演劇的パフォーマンス『踊り念仏』は、そんなふうにさりげなく始まり、30分後、何事もなかったかのように終わった。

「踊り念仏」は、太鼓や鐘を叩いて踊り、念仏を唱えて遊行する宗教的行事。平安時代中期に始まり、一部は現代まで宗教的行事として伝わったが、多くは室町時代までに民俗芸能と化した。民俗芸能に関心の深い武田力は、この「踊り念仏」を読み換えて、主体的に街と関わろうとする行為そのものを「踊る」と呼ぶ。これまでも大阪や神奈川の街頭で実施してきた。

現代では、デモをするには警察に届け出る必要があるように、街頭での行為には（暗黙のものも含めて）さまざまな規制やルールがある。それらを武田は「街の条件」と呼び、それぞれの街の条件を事前にリサーチする。公募に応じた参加者たちは、武田から阿佐ヶ谷の「街の条件」の説明を受けたうえで、それぞれの解釈にしたがって、街頭でパフォーマンスを繰り広げた。

その後、参加者同士でなぜそのイブツを演じてみたのか、周りからどのように見られ、それをどう感じたのかなどの感想を共有。武田からは、過去に踊り念仏を行った際の街の条件についても説明があった。そうした「振り返り」を通して参加者は、歴史的背景や抱えている社会的な課題によって、それぞれの街の条件が「デザイン」されていることに気づかされた。

現代社会では、「普通」であることが暗黙裏に要請される。そのなかで、「普通とは違ったもの＝イブツ」を演じることで、自分の中の「当たり前」が揺らぎ、いつも歩いている街がどこか違う相貌を現す。ときには、通行人すべてがイブツに見える感覚に陥ることも。ふるまうべき態度が外部から恣意的に規定されている街に、自分はどのように関わっていきたいのだろう。風船を持って商店街を疾走するイブツをみて、ふと考えさせられた。（浪江航一）

地図データ ©2019 Google, Zenrin

「振り返り」で浮かび上がった街の相貌

パフォーマンスを終えた参加者は、再び集まって、それぞれの体験を語り合う「振り返り」を行った。その場で収録した発言や後日に実施したアンケートへの回答の一部を紹介する。

南口の商店街で二人三脚をして、「イッチニ、イッチニ」と掛け声をかけながら歩いた。通行人の反応はさまざま。見て見ぬふりだったり、ちょっと驚いた様子を見せるも道をあけてくれたり。周囲の目が気になり、最初の一歩を踏み出すまでは勇気がいったが、やり始めたら不安感はどんどん薄らいでいった。他の参加者を見つけたときは嬉しくなり声をかけたり、コラボしたりすることで気分が高まった。意外と周囲の人は気にしないんだなあと思った。

北口の飲み屋街で、踊り念仏を踊った。阿波おどり風だったかも。ほろ酔いの人も多く、それほど浮き立った感もなく。南口交番前では、「阿佐ヶ谷」を英字で「asagaya」とすると、１音毎にaが挟まっていることに気づいたので、aを他の母音に変えてisigiyi、usuguyu、esegeye、osogoyo、asagayaというループをつくり、ラップ調で声に出した。警察官を含めてだれも聞いてなかったけれど。

パチンコ屋で配っていた風船をもらい、それを手に持って歩いた。風船に興味を示して話しかけてくださった人もいた。普段は絶対にやらない行為なので、それを正当化して発展させたくなり、海外からの観光客という設定を加えて、英語で道を訪ねてみた。街の皆さんがとても親切に頑張って道案内をしてくださった。その結果、まったくの他人とコミュニケーションが取れて面白かった。自分の一線を越えるような体感があると同時に、人の善意を欺いてしまった罪悪感が残った。

大きめの鼻歌を歌ったり、変則的なスキップで歩いたりした。周囲の反応はかなり冷ややかで、腫れ物を避けて通るかのような。確実にそこにいるのに、空気のような存在として扱われた。マイノリティが「イブツ」なのか、マジョリティが「イブツ」なのか。それを判断するのは他人なのか、自分なのか。その答えは恥ずかしさの中にあるのかもしれない「イブツ」としての自分の言動を恥ずかしいと感じるなら、それは他人と同じでありたいという思いの現れで、どちらが「イブツ」なのかを理解している証拠なのではと感じる。世界はこんなにも自分本位

パフォーマンス開始前に
武田力（中央奥）から
説明を受ける

で成り立っているのかと思うと、恐ろしいような面白いような、奇妙な気持ちになった。

商店街で二人三脚をした。日常の風景にズレを感じさせる動きというより、明らかに変わったことをしていたため、目を合わせてくれない人が多いものの、「なに、これ？」感が顔に出ていた。飲み屋街では酔っ払いの男性に「面白いね、飲みに行こう」と声をかけられた。でも「イブツ」にはなりきれなかった。役柄や背景がないとやりきれず、自分の行動に何らかの理由をつけようとしてしまう。

人通りの少ないところで、路上に大の字になって横たわった。恥ずかしかったけど、気持ちよかった。「やってはいけない」と思っているからこそ、逆にやってしまう感じだった。

商店街で電柱や看板と建物の壁との間に挟まっていた。年配の女性に「大丈夫？」と声をかけられた。通行人にチラチラ見られると、つい「すみません」と謝ってしまう。悪いことをしているわけではないのに、なぜだろうと思った。

アーケード街のコンビニ前に立って、上の方にある看板をじっと見ていた。通行人の反応は2通りあった。上になにかあるのかなと見上げる人と、友だちでも待っているのかなと見守る人。後者は、待っているのじゃないと分かった段階で、看板を見上げる人が多かった。

商店街の地図の看板があったので、その下に座り込んでいた。商店街の主のようなかっこうで、「いつでも道を聞いてこい」という雰囲気を出していた。もちろんだれも聞いてこないけど。

飲み屋を探している団体の後ろをついていった。なにをしているか尋ねられたので、「イブツ」としてはやってはいけないのかもしれないが、趣旨を説明した。「面白いね」という反応で、ハイタッチをして「飲みに行こう」と誘われた。

パフォーマンスの後に、
「振り返り」で体験を共有する

駅伝芸術祭　EKIDENART FESTIVAL

開催日時	2018年10月13日（土）13:00スタート
会場	高円寺駅〜西荻窪駅沿線地域
参加アーティスト	山崎皓司＋前川遙子、村田峰紀×松原東洋、佐塚真啓

Date	2018.10.13（Sat）
Venue	From Koenji Station to Nishi-ogikubo Station
Artists	Koji Yamazaki＋Yoko Maekawa, Mineki Murata×Toyo Matsubara, Masahiro Satsuka

スポーツとアートが融合した4時間10分 迫真の完全ドキュメント

オリンピック憲章には「スポーツと文化および教育を融合させる活動を奨励し支援する」という条項があり、近年の大会では会期前から文化イベントが開催されるようになった。だが、それで「スポーツと文化」は融合しているといえるだろうか。今回のTERATOTERAはスポーツとアートを融合させる試みに取り組んだ。それが、（おそらく）世界初の「駅伝芸術祭」だ。晩秋の東京で、３組のアーティストがパフォーマンスをしながら疾走し、タスキをつないでゴールを目指した。４時間10分に及ぶ激走を写真で振り返る。

A Total and Truthful Documentation of 4 hrs and 10 min in which Sports and Art Blended

According to the Olympic Charter, one of the goals of the Olympics is “to encourage and support initiatives blending sport with culture and education.” In recent years, various pre-Games cultural events have been organized to this end. However, are sports and culture truly being blended? TERATOTERA took this issue as its challenge and created EKIDENART FESTIVAL, the world’s first relay race-based art festival. In Tokyo in late autumn, three different artists did performances while sprinting, the first passing a sash to the next, until reaching the finish line. The photographs here allow us to look back on this 4-hour and 10-minute mad dash.

駅伝芸術祭 第1区間

21世紀の桃太郎 高架下に潜む鬼を伐つ

走者

山崎皓司
（パフォーマー）

走者

前川遥子
（ダンサー）

タスキ・第1区間衣装デザイン：若林佐知子

駅伝芸術祭 第2区間

追いつ追われつ くんずほぐれつ 白昼の疾走劇

走者

村田峰起
（美術家）

走者

松原東洋
（舞踏家）

村田選手
笑顔でタスキを受け取りました

商店街を軽快に走り抜けます

突然 何者かが
背後から襲いかかります

松原選手
タスキを奪って ダッシュします

ショッピングビルに
逃げ込みました

商店街を逃げる松原選手

追いかける村田選手

スタッフも
必死でついていきます

コインランドリーでタスキを奪
い返した
と思ったら 手にしていたのは
なんと女性用の下着！

公園で追いつきました
奥の樹にタスキがかかっています

タスキで地面に
ドローイングします

こちらは舞踏を始めました
パフォーマンス合戦の様相です

泥まみれのタスキを手に再び疾走

村田選手が松原選手を
背負っています

商店街で再びタスキを
奪い合います

ようやく中継点に 地面に這い
つくばってタスキを渡します

駅伝芸術祭 第3区間

ひたすら地を這うも ゴールは遠く 日没が迫る

佐塚真啓
（美術家）

第3区間の佐塚選手は
ほふく前進しています
いまだかつてほふく前進で
走破した走者はいません

ママチャリが
走者を追い抜いていきます

中央線の快速が
轟音をたてています

多くのスタッフが見守っています

膝にタオルを巻いています

区間中最大の難所
環状8号線の上を渡ります

安全確保のための手旗は
スタッフの手作りです

1時間強で約500m
あまりに過酷な走法です

膝にカバーを取り付けています

小川希ディレクターが声をかけます
「イベントとしては
日没をもって終了します」

ゴールまでまだ1km以上
日没が迫ってきました

それでも前進します
ネット上には「ものすごい駅伝感」
とのツィートも

拍手を受けて 佐塚選手が
2時間15分ぶりに
立ち上がりました

ゴールを目指して疾走しています

薄暮のなかゴールに
全3区間4時間10分の激走でした

（たぶん）世界初！駅伝芸術祭はオリンピズムの批判的継承である

駅伝＋芸術という前代未聞の形をとり、世界で初めて開催された「駅伝芸術祭」。スポーツとアートが今より近しい関係にあった草創期の近代オリンピックにその源流は見いだせる。現在は強く意識されていないスポーツとアートをつなぐ太く長い水脈を浮上させ、来たる2020年東京オリンピック・パラリンピックをこころやすく迎えたい。この一見奇妙な祭は、本来のオリンピック精神＝オリンピズムの理解を助け、社会的遺産＝レガシーを残す。ただし批判的に。

IOC（国際オリンピック委員会）は、オリンピック憲章で「オリンピズムはスポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求するものである」と根本原則を謳う。また、オリンピックを通じて「スポーツと文化および教育を融合させる活動を奨励し支援する」とも。 これが、オリンピック準備期間から大会開催までの間、主催都市を中心としてさまざまな文化プログラムが組まれ、行政が予算措置する理由である。駅伝芸術祭もまた、東京都から拠出される資金で活動が賄われる、オリンピックに起因したプログラムといえる。ただし、スタッフはほぼすべてボランティアである。

駅伝芸術祭で繰り広げられる芸術の在りようは様々である。参加者には、祭で創造する芸術に制限を設けなかった。詩を吟じながら走ってもよいし、彫刻をつくりつつ歩いても構わない。こうした、幅広い芸術をスポーツと同居させる姿勢は、IOCを組織した近代オリンピックの父、ピエール・ド・クーベルタンの思想から得た。

オリンピックが現在の姿になる前、古代オリンピックを祖形としてオリンピックを掲げたさまざまな大会がイギリス各地などで催されていた。例えば、イングランド中西部の町で1850年から始まり現在まで続くウェンロック・オリンピアンゲームズ。スポーツ以外にも、詩歌、絵画などの芸術種目、なかには豚追い、編み物など、地域の文化や風習と密接に絡んだ、独自の種目もあったそうだ。クーベルタンは、先行するこのような大会を参考にしながら自らのオリンピック構想を固めたという。

実際にIOCのオリンピックでも1948年ロンドン大会までの一時期、スポーツ種目とともに芸術種目が存在した。具体的には、絵画、彫刻、劇作、詩歌、作曲、裁縫、数学、歴史、建築設計、都市計画など実に多岐にわたる。クーベルタン自身も『オド・オ・スポール（スポーツ賛歌）』という詩作で金メダルを獲得したという。また「乗馬ボクシング」など、まったく新しい種目を生み出した。

こうなると、駅伝と芸術が合体することに違和感はない。むしろ、駅伝芸術という一風変わった新種目は、近代オリンピックが元来持っている自由な気風を体現しているといえるだろう。

さらに、駅伝芸術が他のスポーツではなく駅伝であることも、近代オリンピックの歴史と関係する。実は、日本がオリンピックに代表選手を送り込んで以降、スポーツ教育において、駅伝は大きな役割を果たすのだ。

日本初のオリンピック代表選手、金栗四三は、1912年ストックホルム大会にマラソンで出場するも、レース途中で脱落している。金栗はこの挫折から、外国との実力差を痛感して、日本から世界に通用する長距離ランナーが輩出するには、選手層の底上げが必須と考えた。そこで、多くのランナーが関われるリレースタイルの長距離走、駅伝を考え出したのだ。駅伝に市民は熱狂した。衆目のもと走る行為が、出場者も観衆も感化する。駅伝がその起源において教育的権能を帯びていたことが分かる。

ここに駅伝と芸術を合わせた「スポーツと文化、教育との融合」が実現する。駅伝芸術を知らしめることは、こうした無形のレガシー（社会的遺産）を残すことに他ならない。

祭の模様はすべてインターネットで生中継、全世界に配信された。屋外を移動しながらのウェブ中継について、スタッフはみな素人だった。これは新しい映像時代の幕開けを象徴する出来事かもしれない。高スキルで柔軟な対応に腐心した全スタッフに敬意を表す。またなりより、この世界初のプロジェクトに賛同して出場した各組の方々の勇気と胆力を称えたい。

区間途中でサスペンデッドとなった第３組の佐塚真啓は、祭の後「これは美術ではなく芸術だった」と述べた。芸術とは何か。その答えは、2019年度に続く駅伝芸術祭で明らかになるだろう。 (iwaosho)

（左）西荻窪の大会本部。実況中継のスクリーンを見守るスタッフたち
（右）走者の汗と涙と土にまみれたタスキ

TERATOTERA 祭り 2018 Walls - わたしたちを隔てるもの -

TERATOTERA FESTIVAL 2018 Walls : The Things That Separate Us

日時	2018年 11月16日（金）、17日（土）、18日（日）11:00 ～ 18:00 ※スペースエルベは18:30 まで ※トークショーは20:30まで
会場	三鷹駅周辺
参加アーティスト	遠藤麻衣、キュンチョメ、小林清乃、地主麻衣子、砂連尾理、高田冬彦、Tuan Mami、林千歩、本間メイ、maadm
Date	2018.11.16 (Fri),17(Sat),18(Sun) 11:00~18:00
Venue	Mitaka Station Surrounding Area
Artist	Mai Endo,KYUN-CHOME,Kiyono Kobayashi,Maiko Jinushi,Osamu Jareo,Fuyuhiko Takata,Tuan Mami,Chiho Hayashi,Mei Homma

遍在する「壁」を可視化し、対峙し、考える

「TERATOTERA祭り2018」のテーマは「Walls -私たちを隔てるもの-」。2018年夏、それまでTERATOTERAのボランティアスタッフとして積極的にコミットしてきたメンバーによって「Teraccollective」が結成された。そのメンバーたちが話し合うなかで、今回のテーマが浮かび上がった。

私たちの周りにはどのような「壁」があるだろう。見えるもの、隠れているもの、触れられるもの、近づけないもの……。極私的なものから日々ニュースで話題にのぼるものまで、いたるところに「壁」はある。私たちはそれらと、これからどのように向き合っていくのだろうか。受け入れて共存するのか、乗り越える策を練るのか、それとも破壊するために動くのか。

10組のアーティストが、彼らが対峙するWalls＝壁を可視化し、それぞれの向き合い方をみせてくれた。

Visualizing, Confronting, and Pondering Ubiquitous Walls

The theme of TERATOTERA Festival 2018 was “Walls: The Things that Separate Us.” In the summer of 2018, the most committed members of TERATOTERA’s volunteer staff created Terracollective. The theme came out of their discussions.

What kinds of “walls” surround us? Things we can see, things that are hiding, things we can touch, things we cannot get near . . . From the super private to what makes the daily news, there are walls everywhere.

How are we to engage with such things? Should we accept and coexist with them? Should we devise ways to transcend them? Or should we endeavor to destroy them?

Here, ten artists work to visualize the walls they face and the ways in which they choose to confront them.

「TERATOTERA 祭り 2018」のリーフレットのイラストは、イラストレーター・多田玲子が描き下ろした。
原画は会期中、会場の一つ「HYM」に展示され、カラフルな色彩が来場者に好評を博した

Walls –わたしたちを隔てるもの–

「平成最後の〜」というフレーズを耳にすることが多くなった。今回の「TERATOTERA祭り」も「平成最後」。だから、少しだけ平成という時代を振り返ってみたい。

メディアの「平成」評価はおおむね辛口だ。バブル景気がはじけた後の「失われた20年」、阪神・淡路大震災に続く東日本大震災という未曾有の災厄、そして収束の目処さえつかない東京電力福島第一原子力発電所事故と振り返れば、低迷した時代の様相は露わだ。

海外でも、「9.11」に端を発したテロと報復戦争が連鎖し、多くの人々が難民となった。世界の諸国は協調から自国優先へと転じ、対立と亀裂が深まっている。トランプ米国大統領が訴える国境の「壁」は、そうした現実のグロテスクな戯画といえそうだ。

今回、「TERATOTERA祭り」のコンセプトをめぐって、わたしたちひとりひとりが直面する課題を語り合った。貧困や障害による格差と差別、ジェンダーや性的自認の多様性への忌避ないしは拒否、国籍や思想に対する憎悪を隠さない言動……。ひとびとを分断する動きに通底するキーワードとして浮かび上がったのが「壁」だった。すでに社会的な課題として顕在化した「障壁」もあれば、視覚化されていない「見えない壁」もある。意識化されないまま心地よくもたれかかっていられる「柔らかな壁」が、わたしたちの内側にもあるのではないか。そうした論議をへて、「Walls–わたしたちを隔てるもの–」が今回のコンセプトとなった。

ここで想起したいのが、1989年（まさに平成元年）、ベルリンを分断していた「壁」が、それを越えようとする市民の熱量によって撤去されるにいたった、という事実。それが契機となって「冷戦」が終結し、「壁のない世界」への期待が高まった。付け加えれば、その2年前、「壁」の西側でライブを敢行したアーティストがいた。イギリスのミュージシャン、デイヴィッド・ボウイだ。壁越しに響くボウイの音楽が、東側の市民をささやかにであれ揺さぶったことは想像に難くない。

アートは課題を指し示す役割を果たすことができる。今回の「TERATOTERA祭り」でわたしたちは、アーティストが「壁」に向き合うことを期待し、それに協力したいと思う。厳然として存在する「壁」だけでなく、見えない「壁」、さりげなくわたしたちの心に忍び込む「壁」。どのような「壁」が立ち現れるのか、不安を抱きつつ期待したい。

Teraccollective

Walls : The Things That Separate Us

Heisei period is the current era of Japan, which started in 1989 and will end in the spring of 2019. It is often heard recently that people say, “This is the last (something) in Heisei”. TERATOTERA Festival 2018 will be also our last festival in Heisei era. Here, let us take a look back over this period.

Reviews on Heisei are not in a positive tone in the mass media. In 1991, the bubble economy collapsed and the “lost two decades” continued after. Massive earthquakes such as The Great Hanshin earthquake in 1995 and The Great East Japan earthquake in 2011 destroyed cities and people’s lives. Moreover, there was the Fukushima Daiichi nuclear disaster, whose solution to the negative effects has not yet been found. Heisei can be described as a period lost in dark clouds.

If you turn your eyes to outside of Japan, September 11 attacks happened in 2001, which consequently followed by endless terrorist attacks and military retaliations. The conflicts resulted in creating a huge number of refugees. Many countries have been leaning towards nationalism rather than seeking for cooperation beyond borders, and international confrontations are growing bigger and bigger. The “wall” on Mexico-US border proposed by President Trump seems to be a grotesque symbol of today’s reality.

To think about a theme for TERATOTERA Festival 2018, we discussed some issues and challenges that we see in our society: Stereotypes and discrimination against people with handicaps, disparity between the rich and poor, aversion and rejection to the diversified gender identity and sexual orientation, hatred and hostility based on nationality, ethnicity and ideology. As hearing what the team members said, the word “wall” came up as a keyword to represent the tendency to separate people today. Some “walls” have already drawn people’s attention as social issues, but also there may be the “walls”, which people are not aware of as problems. How about ourselves? We too, deep inside, might have some “walls” that are so comfortable and safe to lean on and are hard to realize that we have them. Through the discussion, the theme of the 2018 festival has become “The Walls: The Things That Separate Us”.

Here I’d like you to think back on what happened in 1989 (the year happens to be the first year of Heisei). In that year, the Wall that separated the city of Berlin was torn down by the hands of the citizens who tried crossing the border. And it gradually led to the end of Cold War, and people begun to have high hopes for the world peace with no more border. Additionally, two years prior to the fall of the Berlin Wall, there was an artist who stood on the west side of the wall. British musician, David Bowie. It is not hard to imagine that his singing voice moved the hearts of people who heard it from the opposite side, even just a little.

Art can have a part in pointing out problems. In TERATOTERA Festival 2018, we expect and support the artists to confront the “walls”. Not just the recognizable walls, but also the invisible walls secretly built both in the society and in our minds. It is fearful but hopeful to see how artists will unveil the hidden walls for the festival.

Teraccollective

開催地マップ　MAP

1　小林清乃
旧竹田製麺所
(武蔵野市中町2-17-2)

2　砂連尾理
武蔵野タワーズ スカイゲートタワー前広場
（武蔵野市中町1-12-10）

3　遠藤麻衣
HYM
（武蔵野市中町1-5-8ハモニカ横丁ミタカ）

4　キュンチョメ
スペースエルベ
（武蔵野市中町1-2-9サンローゼ武蔵野 2階）

5　林千歩
北口交番横
（武蔵野市中町1-14）

6　Tuan Mami
武蔵野芸能劇場 小ホール
(武蔵野市中町1-15-10 2階)

7　地主麻衣子
武蔵野芸能劇場 小劇場
(武蔵野市中町1-15-10 3階)

8　高田冬彦
みたかスペースあいB
(三鷹市下連雀3-28-20 1階)

9　本間メイ
三鷹中央ビル2階
(三鷹市下連雀3-28-20)

10　maadm
三鷹中央ビル2階
(三鷹市下連雀3-28-20)

11　トークショー
三鷹中央ビル2階
(三鷹市下連雀3-28-20)

親密な関係の裂け目をさぐる 女性と蛇の転生譚

コンテンポラリーへびんぽじゃじゃりの引退

遠藤麻衣（えんどう まい）

アイドルに扮した遠藤麻衣（左）と腕で蛇を演じる黒衣姿の神村恵。遠藤の頭上には「転生」を象徴する蛇の彫像が載っている

蛇が何者かにとらえられる場面

蛇と入れ替わりに登場する遠藤

古風な言葉遣いで独り語りを演じる

女性と蛇が絡む。後方に飲食店のカウンターが見える

会場は飲食店数店が連なったフードコートに隣り合う。調理の音や食事を楽しむ人たちの声が、仕切りのない会場にも聞こえてくる。

そのにぎわいのなかに、鳥の鳴き声が響く。ダンサー神村恵が黒衣姿で登場。蛇のメークを施した右腕が動き出す。会場に緊張感が広がる。テーブル、そして床へと、ゆっくりとした気品さえ感じさせる動きで蛇が這っていくと、会場に森の情景が浮かび上がる。口を大きく開けて卵を飲み込む蛇は、野生の強さを感じさせる。しかし、その蛇も何者かに捕まり殺されてしまう。

神村と入れ替わるように、俳優・美術家の遠藤麻衣が登場する。現代の若い女性らしい装いだが、その言葉遣いは時代錯誤的に古風で、語りの脈絡もたどりにくい。さらに場面が変わると、遠藤が演じる女性はアイドルとして舞台に立っている。照明に白く輝く左腕は、神村が演じる蛇と化し、蛇がアイドルに憑依したかのようだ。アイドルグループ風の楽曲が流れると、二人は息のあったダンスを繰り広げる。♫ヘビーユーザー、ヘビーユーザーというリフレインがいつまでも耳に残る。

女性と蛇というモチーフは、「松浦佐用姫」や「道成寺」などの異類変身譚を思わせる。それらの物語のなかでは、蛇は転生を繰り返して、家族や恋人たちを引き裂く存在として現れる。遠藤版「蛇物語」ともいうべき今回の作品は、「転生」を現代的な女性を象徴するアイドルの「引退」に重ね合わせる。蛇の無言劇から、女性の独り語り、そしてアイドルショーへと、転変する場面を追いながら、現代における親密な関係の「裂け目」へと思いを馳せた。（佐藤卓也）

アイドルグループ風の楽曲で踊る

沈黙の間に浮かび上がる 沖縄のリアルな状況

完璧なドーナツをつくる

キュンチョメ（きゅんちょめ）

狭い会場に3日間で約260人が来場。
最終日は立ち見状態になり、入場を諦める人も

キュンチョメ手作りのドーナツとサーターアンダギーも

作品には、辺野古の基地建設に反対する座り込みに混じり、
機動隊員に排除されるナブチの姿も

インタビューに応える沖縄のバーの店主

アメリカのドーナツは円形で穴が空いている。沖縄の揚げ菓子サーターアンダギーは小さなボール状。「米軍基地のフェンス越しに、この二つを合わせて完璧なドーナツをつくりたいんですけど、どう思いますか？」

映像作品「完璧なドーナツをつくる」は、そんな問いかけを沖縄の人々に投げかける。制作したのはホンマエリとナブチのユニット「キュンチョメ」。沖縄でさまざまな人々にインタビューした記録映像を中心に構成する。

面白そうだけど、バカバカしくもあり、どこか意味深長。そんな問いかけに、「うん、いいんじゃない」と即応する人もいれば、「それは…あれねぇ…どういう意味ねぇ…？」と戸惑う人も。

約90分の映像に10人のインタビューを収める。米軍のヘリパッド建設に反対する人から、基地関連工事を請け負う建設会社の経営者、米兵相手のバーの店主、“アメリカ&沖縄ミックス”のお笑い芸人まで。年代も立場も異なる人々が、ときに笑いを誘うやりとりを交えつつ、ことばを探して迷い、考え込んで言いよどみ、怒りを抑えるかのように押し黙る。その沈黙の間から、沖縄の人々が直面するリアルな状況が浮かび上がる。

会場では「完璧なドーナツをつくること」への賛否を問う投票も行われた。選択肢は「賛成」と「反対」のみ。投票用紙を手に、〈穴のないドーナツって、そもそもドーナツなのか？〉という定義への疑問や、〈ドーナツがアメリカで、サーターアンダギーが沖縄。なら日本本土は桜餅か？〉という表象レベルの愚問まで、雑念が次々と湧き上がり、脳内はとめどない混乱状態に。

「完璧なドーナツ」はどこまでも転がっていく。（西岡一正）

食べかけのサーターアンダギーを手に、一票を投じる

最終日のトーク。2月に行われる沖縄の県民投票について語り合った。
右からゲストの宮原一郎さん（選挙ライター）、居原田遥さん（キュレーター）、
キュンチョメのホンマエリとナブチ

夢と死をめぐる語りに耳を澄ます 静謐な多声空間

インタビューセッションセラピー・プラクティス「交わるとき、あなたの語ることの声」

小林清乃（こばやし きよの）

照明を落とした展示会場。複数の参加者の音声が流れているが、静謐さを感じさせる

参加者の音声に聴き入る観客

小林がインタビューに用意した質問項目

会場の一隅。小林による繊細な設えがうかがえる

会場となった元製麺所

初めて小林清乃の作品を知ったのは2017年秋に中之条ビエンナーレで鑑賞した「Polyphony 1945」である。繊細さと力強さが同居する印象を受けた。

それから１年後、TERATOTERA祭りのコンセプトが決まったとき、私は招聘作家として小林を提案した。今回のTERATOTERA祭りのコンセプトは「Walls –わたしたちを隔てるもの–」だ。小林の作品と壁がどう紐づくか、そのときは明確ではなかったが今後、何かになるかもしれないと直感が働いたのだ。

今回の作品はインタビューセッションセラピーのワークショップを事前に行い、会期中、元製麺所だった会場でサウンドインスタレーションとして展示した。

ワークショップでは、小林が設えた空間に小林と参加者が一対一となり作品で使用する音声音源を収録した。具体的には、「人は必ず死ぬもの」という共通点をお互い共有しながら、小林が用意した28項目の質問に参加者のペースで答えてもらった。質問は夢の話や死者との遭遇体験、自らの死後について。軽々乗り越えられる壁（質問）もあれば簡単には乗り越えられない壁（質問）もある。

サウンドインスタレーションの展示では、向かい合った2脚の椅子の片方に設置したスピーカーからワークショップで収録した参加者の音声が流れる。椅子のセットは7組だった。

スピーカーから流れる各音声は無機質ではない。小林が語りの具体性を保ちつつも抽象的な印象になるよう編集。声の主の気配がダイレクトに伝わる。椅子に座ると対面したスピーカーからソロパートのように音声が響き、立ち上がり椅子から離れると各椅子から流れる音声が全体的に多声様式のように響く。

会場に足を踏み入れた鑑賞者たちは、旋律のように流れる音声に耳を傾けながら、小林が設えた会場を回遊するのである。（山上祐介）

即興セッションに人を隔てる「空気」を見る

欲望の音

地主麻衣子（じぬし まいこ）

地主麻衣子（右）の問いにパーカッショニストのジョン・ブレナンが即興演奏で応える。2017年にカナダ・バンクーバーでパフォーマンスとして公開された

「TERATOTERA祭り」では、パフォーマンスを記録した3つの映像を横長に配置して上映された

手元をクローズアップした映像が、パーカッショニストの内面をうかがわせる

欲望をめぐる問いに、自らの内面を探りつつ演奏するパーカッショニスト

生まれたての音と映像を、生まれる過程含めそのまま体験する。これはそんな作品だ。以上終わり。本当はそれでいい。作品に記録された、欲望に関する対話と演奏は充分エキサイティングなのだから。だが一方、構成が簡潔なので、作品のあちこちにある余白に思い巡らすこともできる。以下はあくまでひとつの見方。

この映像作品の鑑賞者は、終始三つに分割された横長の画面を見る。まず一番右。地主麻衣子が、三脚に据えたムービーカメラを、ドラムセットに座ったパーカッショニストに向ける全景を収めた、いわゆるマスターショット。背景には地主が撮る映像をリアルタイムで映すスクリーン。次に中央が、スクリーン内の映像と同じく、パーカッショニストを正面から捉えたショット。最後に左側が、ドラムの打面を映した固定ショット。編集なし。3面それぞれが69分間に起きたことを、捉えた範囲でありのままに伝える。

欲望に関する地主の問いかけに、パーカッショニストが答え、やりとりから湧き起こるイメージを即興演奏するという展開が繰り返される。問いは、身近な性的欲望から、極限の禁欲といえる即身仏についてまで。対話の内容も特に事前に打ち合わせたわけではなく即興だそうだ。

こうしたパフォーマンス後半の演奏中、ドラムセットのシンバルが倒れてしまう。しかし、地主もスタッフも誰ひとりシンバルを起こそうとしない。残された時間の演奏を乗り切れるのか。編集がないので、その場にいる客のようにハラハラしながら事の推移を見守る。やがてパーカッショニストは演奏を途切れさせずにシンバルを立て直すことに成功。しかしこの距離感は何なのか。

地主とパーカッショニストの間には、ただ空間が、空気があるだけなのだが、そこに実は見えない仕切りがあるのではないか、と想像してみる。すると今回のTERATOTERA祭りのテーマであるWalls＝壁に似た、しかしそう固くもない、膜状のものが何層も立ち上がってくる。

会場のスクリーン。ドラムの打面を覆う皮。空気の震え。画や音を伝えるのに必要不可欠な物質は、また同時に人を分かちもする。付かず離れず、踏み込みすぎず付け入らせず。そういう距離感が醸す人と人の関係を見る、空気を見る1時間超なのかもしれない。（岩尾庄一郎）

妊婦の揺れる思いを受け止め 幸福感に包まれる

妊婦さんと踊る

砂連尾理（じゃれお おさむ）

妊婦の思いを込めてラップを歌った古原彩乃に応えて、砂連尾理が踊る。後ろで演奏するのは音楽家・片岡祐介

砂連尾のダンス。
観客には若い女性や子供を連れた女性の姿が目立った

ダンサー・振付家の砂連尾理は、今回の「TERATOTERA祭り」のコンセプト「Walls」を受けて、ダンスとワークショップを組み合わせたパフォーマンスを構想した。同じ時期に、ある助産院からワークショップのオファーがあり、その偶然のつながりから妊婦と胎児の間にある「お腹の壁」に焦点を当てた。

『妊婦さんと踊る』と題したパフォーマンスは、タワーマンション前の広場を会場に、砂連尾とアートコーディネーターで妊娠7ヵ月の古原彩乃との共演で始まった。砂連尾が古原のお腹に触れて、胎動を感じ、踊り出す。お腹という壁を越えて、胎児がその姿を観客の前に現したかのような踊り。それに返歌をするように古原が、妊婦の日々の思いをラップで歌い始める。

――優生思想、そういうの自分は全く遠いと思ってた。そんな考え嫌だと思ってた。けど妊婦の私、母親の私、今すごく身近にそれがある。（中略）でも健康を願うこと、幸せを願うこと、それは悪いことじゃないし。なんかモヤモヤするんですよね……。

観客には妊娠・出産を身近に感じる世代の女性が目立つ。妊婦の揺れる思いを表現したライムに、ときに笑いをもらしつつ、妊娠・出産にかかわる政治社会的な言説にも思いを巡らせる。

『妊婦の叫び』と題したラップを古原は

――大好きな人と子供を授かるそれはやっぱり幸せだなって思う。会えるのが楽しみ。

と締めくくり、大きな拍手を浴びた。

砂連尾にワークショップを依頼したのは、立川市にある「まんまる助産院」。産前産後ケアとともに分娩介助を行う希少な助産院という。院長の椎野まりこが登場し、「妊婦は生む力を持っている。そのスイッチを入れるために、脳と体をつなげるよう空想する力」を砂連尾のワークショップに期待した、と語った。それに続けて、30年におよぶ助産婦としての経験に基づく、圧巻の「擬似出産パフォーマンス」を披露。その感想を観客から募って、音楽家・片岡祐介が即興で作曲し、観客とともに楽しく合唱する和やかな一幕も。

約50分のパフォーマンスを締めくくったのは、古原と、公募に応じたもう一人の妊婦。二人の胎動を手で感じ取った砂連尾は、腕をゆっくりと上下になびかせながら後ろ向きに遠ざかっていく。その歩みが妊婦のお腹の空間を広げ、観客をも包み込む。二人の妊婦は、お腹を覆う布の下に寄り添ったそれぞれの夫とともにゆるやかに踊り始める――。

晩秋の寒空の下、観客はお腹の壁を超えて胎児とともにある幸福感に包まれた。（森ゆうな）

（上）助産婦・椎野まりこによる擬似出産のパフォーマンスで、無事出産した場面
（中）出産を夫婦の共同作業とみなして、
夫が苦しみを表現する習俗「擬娩」を模したパフォーマンス
（下）フィナーレで、布の下で寄り添う夫とともに踊る二人の妊婦

少女の欲望が世界を破壊する「怖い」童話

Dream Catcher

高田冬彦（たかた ふゆひこ）

暗幕で閉ざされた会場で上映される『Dream Catcher』。塔に閉じ込められた少女が窓から外の世界を眺める

真っ白な壁に映し出される、一人の少女。窓から身を乗り出すように外を見ている彼女の姿は、グリム童話「ラプンツェル」を思い出させる。

童話のラプンツェルは、生まれて間もなく魔女の住む高い塔に閉じ込められた。外の世界と繋がるのは、魔女が梯子として使う長い髪と歌声だけ。やがて成長したラプンツェルは毎日窓辺に立ち、いつの日かこの場所から救い出されることを願って歌う。

♫いつか王子様が私を見つけだし、お城に連れて行く……

歌は繰り返され、思いは募る。でも塔からは出られない。そして、髪は果てしなく伸びていく――。

グリム童話を下敷きにした映像作品『Dream Catcher』で、少女を演じるのは俳優・美術家の遠藤麻衣。部屋から見える緑の丘や町並みは、高田が丁寧に手作りしたミニチュア。可愛らしいメルヘンのような風景を背景に、少女は憑かれたように歌い続ける。そのギャップのなかで物語は進む。

王子を求める気持ちは抑えきれない欲望となり、自らの髪を窓から垂らし王子を釣り上げるという奇策へと少女を衝き動かす。一点を見据える視線の危うさは、この物語が彼女の願うような結末にはならないことを予感させる。

歌いながら舞踏会のようにぐるぐると踊る少女は、釣り糸と化した自らの髪でがんじがらめになっていく。手に入れたかった幸せは見つからないまま。少女の体が巻き取る髪は同時に、そのうねりで緑の丘や町並みを大地震のように破壊していく――。

女の子にとって王子様との結婚は人生のお約束なのか。世界から隔絶した場所にいる者の抑圧された本能は、高い壁を軽々と越え、ときに身を亡ぼすほどに暴走してしまう。

エンディング。白い雲がふんわり浮かぶ空の下、破壊されつくした世界の光景に、抑圧された欲望の勝利を感じ、思わず自分の髪に手をやった。（前川順子）

『Dream Catcher』から

メルヘンを思わせる風景の中に塔がそびえたつ

塔の窓辺で「いつか王子様が…」と歌う少女

髪の毛の激しいうねりが家並みを破壊していく

少女は全身を髪の毛で覆われてしまう

世界を破壊しつくした少女は
塔とともに地中に沈んでいく

開発で変容する故郷の自然と暮らしをみつめる

In A Breath-Nothing Stands Still, Chapter4

Tuan Mami（とぅあん まみ）

映像や写真で構成されたホール内のインスタレーション。
テントは環境破壊に抗議する人々を象徴する

作家Tuan Mamiはしばしばテントの下で観客と話し合った

開発で変貌する故郷の山岳風景を空撮した作品

『In A Breath-Nothing Stands Still, Chapter4』はベトナム出身のアーティスト Tuan Mami によるインスタレーション作品。鉱物資源の過剰な採掘によって環境破壊が進む、両親の故郷（ベトナム北部の鉱山地域ハナム）を題材としている。長年にわたるフィールドワークをもとに制作された。

会場は武蔵野芸能劇場の小ホール。薄暗い室内に、どこか不穏でミステリアスな BGM が響く。

左右の壁には、二つの映像が投映されている。いずれもハナムで撮影されたもの。一つは、山岳地帯の風景とそのなかで生を営む人々の姿を追う。幻想的で内省的な映像が観るものを思索へと誘う。もう一つは、殺伐とした採掘場周辺を少年が彷徨するドキュメンタリー風の映像。マフィアが利権を争う採掘場は危険が伴うので、親類の少年の撮影を装ったという。

少し奥の壁には、鉱物の採掘場をはるか上空から撮影した写真が不規則な配置で貼られている。ホールの中央には、現地で見かけるような簡素なテントが設営され、その下に置かれたモニターには、鉱山の発破シーンの動画が繰り返し再生される。

故郷を彷彿させる映像や写真が断片のようにちりばめられた、異空間。暗がりの中に出現したその場所には、開発の影響で変容する自然の姿や人々の暮らしが、さまざまな表現方法と視点で描き出された。

映像に映し出される故郷の風景は一見すると、霧がかかって、神秘的。しかし霧の正体は採掘の過程で発生した粉塵で、現地の住民たちの健康を脅かしている。抽象的な模様のように見える空撮写真は、目を凝らせば、大規模な採掘で様変わりしていく地形を捉えている。ものごとの見え方は、距離や角度あるいは立場でいかようにも変わってくる。

作品が投げかけてくる問いに、何を感じ、どんな答えを出すのか。それは鑑賞者である私たちに委ねられている。

（国広綾子）

抗議する人々のテントの重しとなった石の写真

ホール前の空間の窓にも写真作品を展示。
郷里では民家のドアや窓は、粉塵を防ぐためにカーテンで覆われているという

小さな「脳」たちの、不自由なライブペインティング

わたしの頭の中はあなたに支配されている

林千歩（はやし ちほ）

駅前広場で小さな「脳」たちが絵筆をふるう。その姿に通行人が足を止める

「脳」たちの奇妙な「制服」

合間に楽器をたたく「脳」も

扱いにくい「筆」で描き続ける

林千歩が初めてのライブペインティングに挑んだ。

今までは映像系の作品を多く観ていたので、事前に「ライブペインティングをする」と聞いた時は、どんな作品になるのか想像すらできなかった。

だが、できあがった作品は「林千歩」以外のなにものでもなかった。映像と同じようにカオティックでグロテスク、そしてどこか考えさせられる作品体験……。

ライブペインティングの会場は三鷹駅前の広場。といっても、林自らが描くわけではない。白い大きなキャンバスの前に集まった小さい「脳」たちが、林の指令を受け取って絵筆をふるうのだ。テーマは「体内」。脳、肺、眼球、腸、子宮といった臓器がキャンバスに現れ、観客や通行人の目を否応なく惹きつける。

だが、それぞれの「脳」が持つ筆は、いくつにも分かれた枝や長い棒、金属のパイプホースなど。どれも扱いづらく、絵を描くには不合理で不釣り合い。もちろん線はブレ、絵具ははみでて、「上手く」は描けない。

でも、それがいいと林は言う。子供のころのような線、ぎこちない線がかっこいい、と。小さい「脳」たちによる、バラバラの、つたない線。その集合が一つの大きな絵になっていく。

3日間のライブペインティングが終わって、残った絵はグロテスクなものだったかもしれない。少なくとも「美しく」はない。でも、どこかユーモラスでもある。それでいい。不自由、不合理な状況で、一つ一つの線はズレて、ブレて、つたない。それでも絵は描ける。

描きづらく、生きづらく。それでも絵は描ける。そんなことを想った。（立山周一郎）

完成作。画面には臓器がひしめく

語られざる歴史をたどる映像インスタレーション

Buku harianku tetapi bukan ingatanku -My diary but not my memories-

日本語訳『私の記憶ではない私の日記』

本間メイ（ほんま めい）

展示会場は雑居ビルの2階にある空き店舗。正面にスクリーンがあり、右側にTVモニター、参考資料が展示された

本間メイは東京とインドネシアのバンドンを拠点とする。自分が暮らすバンドンの歴史を調べていて、日本占領期のインドネシア各地にはオランダ民間人収容所があり、バンドン市内にあるチハピット市場の目の前にも収容所が存在していたことを知った。

インドネシアはかつてオランダの統治下にあり、第二次世界大戦中は日本に占領されていたという歴史をもつ。その歴史への探索の記録を映像インスタレーションとして構成した。

正面の壁に投映される映像では、前半はかつて収容所のあった地域をめぐるが、その痕跡は判然としない。後半は市場で働く老女が日本占領期、またインドネシア独立戦争期を体験した半生と思い出を語る。本間がインタビューをしなければ埋もれたままの記憶だっただろう。

本間の探索とその結果としての展示は多層的だ。日本占領期に収容されていたオランダ人の日記などの記録を読み込み、その分厚いテキストの束を展示する。会場全体は照明を落としてあるが、そこだけライトに照らされていて、観客は手に取って読むことを促される。

会場に設置された小型TVモニターは順次、赤、白、青と色が変わっていく。この３色はオランダ国旗の色であり、青を除くとインドネシアの国旗の色になる。そこに日記から引用されたインドネシア人の下男の言葉がかぶさる。日本占領期になって掲げることが許されたインドネシアの国旗を見て、主人に訴える。「この旗は完全じゃないですよ、ご主人。青色がないですよ！」――。オランダ統治下に生き、インドネシア人でありながらオランダ国旗しか知らない下男。その真率な叫びが、観客を困惑させ、言葉にしがたい自問に導く。

目が見えて言葉を話せても、関心を持たなければ見えないということ。自分が知らないことに関心を持ち、誰かの記憶を自分の中に置いてみること。そうした想像力を持てれば隔たりを縮めることが可能かもしれない、とほのかな希望を感じた。

（林真実）

本間がリサーチに用いた資料。
参考資料：『日記でみる日本占領時代の蘭印』（オランダ戦争資料研究所）

映像作品から
（上）市場にある友人の書店。この書店をきっかけに、今回の作品のリサーチが始まった
（中）オランダ民間人収容所をたどったロードムービー風の場面
（下）市場で働く女性。日本占領期とインドネシア独立戦争期の体験を交えて、自らの半生を語る

嗜虐的な心理を可視化する実験的パフォーマンス

Can you stop?

maadm（まっどえむ）

「Can you stop?」の会場。
中央に「対象」役のmaadmが実験用の椅子に座り、
その表情が正面の壁にリアルタイムで投映される

電流に耐え、苦悶の表情を浮かべる「対象」役のmaadm

「研究者」が「被験者」役の観客に操作方法を説明する

maadmは「どうしたら人が他者への攻撃の手を緩めることができるのかを試したい」という動機から、パフォーマンス・インスタレーションを展開した。土台にしたのは、閉鎖的な状況下で権威に服従する人間の心理を分析した「ミルグラム実験」。ナチスの戦犯たちが残虐な行為をなしえた理由を検証するために、1960年代にアメリカで行われた実験だ。

実験の「被験者」役は観客から募った参加者、maadm自らが「対象」役となり、テラッコが「研究者」役を務めた。参加者は本来の実験では使用されなかった電流をテラッコの指示によりmaadmに通電する。参加者の頭には脳波測定機が装着され、その脳波の変化はリアルタイムで記録されていくのだが、脳波が憂鬱・悲しい・動揺といった感情に傾くまで実験を止めることはできないというルールが課された。

0ボルトから190ボルトまで設定された電流は段階的に強くなっていき、maadmは次第に苦痛の表情を浮かべるようになる。

その過程で参加者は実にさまざまな反応を示した。すぐに実験が終了してしまう者、外見上は動揺しているが脳波は興奮状態を示し続ける者、快楽の状態を示したまま190ボルトまで通電した者。なかには嫌悪や恐怖から作品に近寄らない観客もいた。

参加者は一様に自らの脳波が描くグラフに驚き、この作品体験に息を呑む。私たちテラッコは参加者とともに、人間の感情の複雑さと残酷なまでの多様性を目の当たりにした。

maadmが最終的に何を感じたかは分からない。しかし、私はいま改めて彼の作品を振り返ることで、この難解な生物である“自分”と、同じく“自分”として生きる他者との関係について考えさせられている。（遠山尚江）

電流を流す「被験者」役の子供たち

「被験者」の「感情」がリアルタイムで表示される

参加アーティスト9人が語る作品に込めた思い

TERATOTERA祭り2018トークショー

「TERATOTERA祭り2018」のテーマは「Walls―わたしたちを隔てるもの―」。祭りの2日目に、参加アーティストのうち9人によるトークイベントが開催された。テーマと作品の関係のみならず、作家自身の口から語られる作品の誕生秘話にいつしか聴衆は引き込まれていった。

（構成：三浦留美）

地主麻衣子『欲望の音』

・外的な環境が原因で欲望が減る状況はどういうことなのか漠然と考えるようになった。欲望についてやると決めた時、欲望の音はドラムかなって直感で思った。

・作品を考えるうえで、普段生きているなかで感じる社会的な葛藤とか問題が契機になることが多い。

・問題が起きている「壁」のある現場には行けなくて、うじうじ考えているだけなんだけれども、やっぱり、それについては考えているし何かしら言いたい。そのせめぎあいのところで作品を作っている。

本間メイ『Buku harianku tetapi bukan ingatanku-My diary but not my memories-』

・インドネシアでは日本に占領されていたことによる嫌悪感はそれほど強くないし、周囲の人が優しくしてくれる。そのせいか、言葉の壁、生活習慣の壁はあまり感じない。ただ超えてはいけない壁というか、日本はかつてインドネシアを占領した国であり、自分は日本人であるということは忘れないようにインタビューをした。

maadm『Can you stop?』

・ハッピーじゃないと分かっていても権力と支配の構造って見ると安心する。ゆがんではいるんだけど、抑圧された状態に執着する自分がいる。それは自分が子供の頃から見ていた家族の影響が大きいかな。外に出て客観的に権力と支配の構造を作れるようになった。

・人は思っていないことでも言えてしまう。だから、この数年、コミュニケーションのねじれが生じないように、言葉が出る前にその人が何を考えているか分かるようにすることにトライしている。でもそれが分かったところでコミュニケーションは上手くはいかないんだけど。

Tuan Mami『In A Breath-Nothing Stands Still, Chapter4』

・作品に出てくる採鉱場は両親の故郷。小さい頃から知っている場所ゆえに、環境が酷くなっていることに怒りすら覚えてリサーチを開始した。マフィアのような人たちが仕切っている場所だけに、映像を撮るのをどうするかが問題。結局子供に案内してもらうようにしながら撮影した。炭鉱業が入ってきたことで変わってきた土地に住む人々の宗教観や思想も見せたかった。

ホンマエリ（キュンチョメ）『完璧なドーナツをつくる』

・社会問題の「壁」可視化問題が自分の中にある。可視化しただけで終わってないか？ということが多い。その状況にいらついている。可視化しただけでは、アートは何もできていないし、アートは世の中を動かせていない。

・沖縄の基地問題をとりあげた今回の作品をゆったりと見てほしくなかった。だから観客にも、完璧なドーナツをつくることに「賛成」か「反対」で問い、投票してもらうことにした。

・最近は壁のあるところに行って争うくらいの気持ちを持って作品をつくることが多い。

・基地についてインタビューして感じたことは沈黙が大事だということ。言葉と言葉の間の沈黙に緊張感がある。そこには悩み、怒り、私に対して気を使っていたり、うがった見方をしていたりがある。スリリングだけどそこにリアルがある。だからこそ一番大事にしている。

遠藤麻衣『コンテンポラリーへびんぼじゃじゃりの引退』

・コンテンポラリーな職業の引退をテーマにした。演技をすることは自分の作品の中の表現手法のひとつ。自分と違う役柄や遠い存在を扱ったりする。一方で、現実の生活と切り分けられずに作品をつくっているところもある。それが自分の制作のスタンス。だから後で大変になることもある。

・へびは壁に隔てられた二つの世界をすり抜けるような存在。壁が可視化されたときに、へびは暴力的に破壊するというよりもしれっと抜け穴からすり抜ける。

神村恵（遠藤作品に出演）

・普段、自分が踊る上では引退ということと関係なくどうやったら続けていけるかを考えながらやっている。もし自分がダンスを引退してしまったとしても違う形で続けるかも。

小林清乃『インタビューセッションセラピー・プラクティス「交わるとき、あなたの語ることの声」』

・ポートランドのレジデンスに行くまえに大事な人を亡くした。レジデンス中に体験した不思議な出来事や夜ごとみる象徴的な夢。 同時に自分の中に抱え込んでいるさまざまな思い。目の前にある新しい環境と新しい仲間に入り込もうとするほど、それらは複雑に絡み合い、物語り化していく。やがて自分に起きている経験と同じようなことを仲間や現地の人々も体験しているのではと思い始める。

・レジデンス先のディレクターに、自分のフィーリングにフォーカスして作品を作っては、と言ってもらえたことが、インタビューセッション・プラクティスという形の作品につながった。今回の展示は日本での新たなインタビュー音源を加え展示構成を改変したもの。

高田冬彦『Dream Catcher』

・壁を作ることとか、その中でもがいている自分とか、でもそれをよじ登って越えたいという思いとか、そういう自分の中のぐずぐずを直視することが制作につながっていると思う。

・自意識過剰の問題、ねじれたナルシズムの問題は、現代社会では僕だけの問題ではないし、大事なことだと思っている。

・おとぎ話には、例えば塔に閉じ込められてそこから出るというような話が頻出する。思春期、自分と他人、子供と大人、そういった境界線のメタファーだと思う。

・思春期的な葛藤は大人になっても多かれ少なかれ続いていると思う。

・２～３ヵ月くらい、人とも話さず部屋の中で街のミニチュアをつくっては壊しを繰り返していた。大変だったけれど僕にとっては至福の時間だった。

ARTIST PROFILES アーティストプロフィール

踊り念仏

武田力
Riki Takeda

演出家、民俗芸能アーカイバー。幼稚園勤務を経て、俳優として演劇に関わり始める。近年は民俗芸能の構造に着想を得ながら「糸電話」「警察署員との話」「たこ焼き」などを素材にして作品を制作。また、過疎化の進む滋賀県内の集落で受け継がれてきた六斎念仏踊りの「継承」を担う。こうした民俗芸能の「保存」と「活用」の互恵的な関係から、観客とともに現代社会を軽やかに思考する作品を展開する。アーツコミッション・ヨコハマの若手芸術家育成助成／クリエイティブ・チルドレン・フェローシップに2016、17年度と選定される。

駅伝芸術祭（出演順）

山崎皓司
Koji Yamazaki

1982年、静岡県出身。劇団「快快-FAIFAI-」のメインパフォーマー。変化し続けるメディア、アートの最前線にアクセスしつつ、社会性とポップで柔らかなユーモアを併せ持つメッセージを発信する。「快快」以外の活動として、多田淳之介、危口統之、糸井幸之介、杉原邦夫、西尾佳織らの舞台作品に出演。元プロボクサーとして試合経験もある。現在は自然主義に傾倒中。

前川遙子
Yoko Maekawa

ダンサー・振付師。1982年、東京都出身。4歳からクラシックバレエを始める。2000年、劇団四季に入団、『MANMA MIA!』、『オンディーヌ』などに出演する。2006年、ニナガワスタジオに入団し舞台に出演。現在はCM、ドラマ、雑誌などのメディアでの活動を広げる。

村田峰紀
Mineki Murata

1979年、群馬県生まれ。前橋市在住。2005年、多摩美術大学美術学部彫刻学科卒業。原始的身体所作で強いインパクトを与えるドローイングパフォーマンスや、その結果として産み出されるインスタレーション、映像等を発表している。2016年からOngoing Collectiveのメンバー。個展に「vision inside」（rin art association、群馬、2018年）、「 ＋ 」（ギャラリーハシモト、東京、2017年）。グループ展に「現代ドローイング国際芸術祭『TWO STICKS』」（ヴロツワフ建築博物館、ヴロツワフ、ポーランド、2016年）。パフォーマンスイベントに「間人」（村田峰紀＋首くくり栲象＋山川冬樹、前橋市芸術文化れんが蔵、群馬、2016年）。

松原東洋
Toyo Matsubara

舞踏家。1975年生まれ。舞踏団「トンデ空静（からしずか）」主宰。演出、振付、出演をおこなう。国内外の里山や市街など場所を生かした公演や映像作品を発表する。「渋さ知らズオーケストラ」に20年在籍する舞踏手として、年間60本に及ぶ国内外の公演に出演する。他に戌井昭人主宰の劇団「鉄割アルバトロスケット」や東野祥子・カジワラトシオが設立した「Antibodies Collective」の舞台にも参加している。

佐塚真啓
Masahiro Satsuka

1985年、静岡市生まれ。丑年。おうし座。長男。A型。右利き。1992年、漫画『ドラゴンボール』に出会い、初めて人の創り出したモノで感動する。中学、高校は丘の上の男子校に通う。チャリ通。2004年、静岡中央美術研究所で絵を学ぶ。2005年、武蔵野美術大学に入学。在学中の2007年同級生とともに「3番GALLERY」を企画。2009年、同大学を卒業。2011年、青梅市に移住。2012年、友人知人とともに「国立奥多摩美術館」を企画。2009年から民具などの博物館資料を図化すること、人の手伝いなどによってなんとか生計をたてている。「美術」という言葉がいろいろな物事を考えるときに常にキーワードになっている。1日8時間の睡眠を心掛けている。冬はガタガタ震え、夏はダラダラ汗をかき過ごしている。

TERATOTERA祭り（五十音順）

遠藤麻衣
Mai Endo

俳優、美術家。1984年、兵庫県生まれ。フェミニストのイメージを用いた作品制作に取り組んでいる。レクチャーパフォーマンス、ミュージックビデオ、絵本などを制作する。自身の結婚式をモチーフにした『アイ・アム・ノット・フェミニスト！』（2017年）では、婚姻契約という形式をとり、婚姻制度を遊びに転化することを試みた。演劇では、岸井大輔『始末をかく』、sons wo:『シティⅢ』、二十二会『へんなうごきサイファー』、岡崎藝術座『イスラ！イスラ！イスラ！』、西尾佳織『透明な隣人 ～８ -エイト-によせて～』などに出演。

キュンチョメ
Kyun-Chome

2011年から活動する男女のアートユニット。 メンバーはホンマエリとナブチ。世の中に足りないものは「キュンキュン」と「チョメチョメ」だ、ということでユニット名は「キュンチョメ」。現代社会の、理屈ではどうにもならない物事を追いかけている。滞在、対話、アクションを繰り返すことで、その場に埋もれた「個人的な感情」を探り出し、制作のコアとしていく。国内外に活動の場を広げている。個展に 「暗闇でこんにちは」（駒込倉庫、東京、2016年）、「死んでる暇などありません ＃2」（Deptford x、ロンドン、2016年）。グループ展に「Bangkok Biennial2018」（バンコク）、「Reborn-Art Festival」（石巻、宮城県、2017年）。

小林清乃
Kiyono Kobayashi

1982年生まれ。日本大学芸術学部映画学科卒。市井の人々が残した記録物から、特に日記や手紙などに書かれた言葉、話された会話に関心を持ち、パーソナルな語りを集め展開していくことで、個人の視点からみた世界と、俯瞰的または普遍的な観察点からみた世界との内的関係を探る。2017年、第二次世界大戦中に書かれた手紙の音声化を手掛けたボイスサウンド作品『Polyphony1945』を制作。2018年夏はポートランドのレジデンスプログラム「End of Summer」に参加。現地での極私的な経験をもとに「死者との遭遇」を主題とした随筆を執筆。また同じテーマでインタビュープロジェクトを行う。

多田玲子
Reiko Tada

イラストレーター、美術作家。1976年生まれ。著書に『ただいまおかえりなさい』、『八百八百日記』、『NHKみんなのうたえほん うんだらかうだすぽん』（いずれも戌井昭人との共著）。自身のレーベル「GOLDEN BUTTER BOOKS」から漫画『ちいさいアボカド日記』、『てきとう かんたんたん』等もリリース。

地主麻衣子
Maiko Jinushi

1984年、 神奈川県生まれ。多摩美術大学絵画専攻修了。個人的な物語をテーマとしたドローイングや小説の制作から発展し、映像、インスタレーション、パフォーマンスなどを総合的に組み合わせた「新しい種類の文学」を創作する。主な個展に「欲望の音」（HAGIWARA PROJECTS、2018）、「53丁目のシルバーファクトリー」（Art Center Ongoing、2018）。主なグループ展に「黄金町バザール2017」（黄金町エリア、2017）など。

砂連尾理
Osamu Jareo

振付家、ダンサー。1991年、 寺田みさことダンスユニットを結成。2002年、「TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2002」にて「次代を担う振付家賞」（グランプリ）、「オーディエンス賞」をダブル受賞。2004年、 京都市芸術文化特別奨励者。2008年度文化庁・在外研修員として、ドイツ・ベルリンに1年滞在。近年はソロ活動を中心に、ドイツの障害者劇団ティクバとの「Thikwa+Junkan Project」、京都府舞鶴市の高齢者との『とつとつダンス』、宮城県名取市閖上の避難所生活者への取材が契機となった『猿とモルターレ』等を発表。著書に『老人ホームで生まれた〈とつとつダンス〉 ―ダンスのような、介護のような―』。

次ページに続く

高田冬彦
Fuyuhiko Takata

現代美術家、映像作家。1987年生まれ。作者本人が自宅アパートで繰り広げる誇大妄想的な映像作品が近年の主な作風。主な個展に「DREAM CATCHER」(Alternative Space CORE、広島市、2018年)、「LOVE PHANTOM」(Art Center Ongoing、東京、2017年)、「STORYTELLING」(児玉画廊、東京、2016年)など。主なグループ展に「MOTアニュアル2016 | キセイノセイキ」(東京都現代美術館、東京、2016年)など。

Tuan Mami

1981年生まれ、ベトナム・ハノイ在住。ビデオやインスタレーション、パフォーマンスなどの表現方法で、瞑想的な作品の発表を続ける。「Nha San Collective」(ハノイ、2013年)の共同創立者であり、San Francisco Art Instituteの客員教授なども務める。主な個展に「Protest Against the Void」(Defibrillator Gallery、シカゴ、米国、2013年)、「24 Hours Tension」(PØST、ロサンゼルス、2013年)。今回の作品『In a Breath-Nothing Stands Still』はホーチミン(2018年)、ハノイ(2017年)、ロッテルダム(2016年)などでも展示した。グループ展に「The Unauthorised Medium」(アムステルダム、2018年)、「Krisis」(ノッティンガム、2016年)、「Plastic Myths」(アジア文化センター、光州、2015年)など。

林千歩
Chiho Hayashi

現代美術家。映像作品を中心にさまざまなメディアを使い表現する。ときに鑑賞者をも巻き込み、そこで生まれるなにかを問いかける。主な個展に「初美カコ -Project MUSE-」(Art Center Ongoing、東京、2017)。主なグループ展に「六本木クロッシング2019 展:つないでみる」(森美術館、東京、2019)、「島からのまなざし」(東京都美術館、TWS、東京、2014)など。

本間メイ
Mei Homma

1985年東京都生まれ。バンドン(インドネシア)と東京を拠点に活動。2011年、チェルシー芸術大学大学院ファインアーツ科修了。近世から現代にいたるインドネシアと日本の歴史的関係のリサーチを基点に、現在にも通ずる社会・政治的な問題や多国間における関係性を考察する映像作品やインスタレーションを発表している。リサーチの対象は資料やアーカイブといった公的なドキュメントのみならず、小説や日用品にも及び、自身が現地を歩き、映像を撮影するなどの多角的なアプローチを取り入れている。近年は見過ごされがちな女性に関する歴史を主に扱う。

maadm

2011年、武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻彫刻コース修了。感情のぶつかり合いや行き違いをテーマに、自作の装置などを用いた作品を展開している。「ごっこあそびに想いのせて」(Art Center Ongoing、東京、2017年)などの個展を開催するほか、「ゆるんだ遠近法」(AIT、東京、2017年)、「黄金町バザール2014」(黄金町エリアマネージメントセンター、横浜、2014年)などのグループ展に参加。

THE VOICE OF TERACCO テラッコの感想

TERATOTERAの活動を支えるのは、TERACCO(テラッコ)と呼ばれるボランティアスタッフたち。登録者は数百人にのぼる。イベントの企画、広報から当日の運営、記録冊子制作まで、さまざまな役割を担っている。2018年に初めて参加したTERACCO4人に感想をつづってもらった。

「駅伝芸術祭」開催日の朝、大会本部に結集したTERACCOたち

「熊」から「魚」へ

目黒由利恵

元々は美術館の学芸員を志望して大学院までいきましたが、修士論文もギリギリで提出し進路が決まらないまま修了しました。私は本当は何をしたいのか……? 「手負いの熊」のような状態で迷走していた春のある日、冬にTERACCOの方に出会ったことを思い出しました。アートとの関わり方を探ってみたかったのと、いろんな人と関わってみた方がいいと思いTERATOTERAに入りました。

予定が合わないことが多く、準備作業にはあまり参加できませんでした。とりあえずイベントの当日にその会場にいる、みたいな、そんなゆるやかな参加の仕方でした。それでも快く許されて驚きました。打ち合わせなどの集まりに行く度に新しい人と出会い、始めのうちは人見知りで緊張していましたが、最近はTERATOTERA関係の場にいるだけでほっとしはじめたところです。そうなれたのは、「来る者拒まず」な空気が流れているからだと思います。もっといえば「人」でない者が混ざっていても受け入れてしまいそうな土壌を感じます。

TERATOTERAでは、これまで見逃していたものに気づくことができました。どんなに小さなことでも誰かとなにかを共有しあうということ自体が楽しいのだ、という感覚です。定例会で話を聴いている際のどよめきや、いい意味で「えっ!」と笑える瞬間などなど、自分一人では不可能な面白い体験ができて楽しいです。毎回ワクワクとドキドキがありました。穏やかながらも熱いパッションを持った方々が多く、その熱に衝き動かされそうになる自分もいます。ここで出会う方やコトを大切にしながら、今度は「水を得た魚」のように楽しく泳いでいきたいです。

だれもが楽しめる祭りに

永野千晴

今年で8回目を迎えた「TERATOTERA祭り」ですが、初参加だった私は、街なかで開催されるアートイベントがどういうものなのか、期待と不安が入り混じった気持ちで初日を迎えました。

私が担当したのは、小林清乃さんが手がけたインスタレーション作品の会場・旧竹田製麺所です。三鷹駅から徒歩10分ほどと、他の会場と比べて少し離れた場所にありました。それでも、小林さんのファンの方やお友だち、同じ祭りに参加している作家の皆さん、三鷹にお住まいの方々など、さまざまな方に足を運んでいただきました。

何をしているのかと会場受付前を不思議そうな面持ちで通られる方々へは、チラシをお渡ししてご説明したところ、その後見に来てくださった方もいらっしゃいました。「去年もイベントやっていたよね」とお声をかけてくださった方もおり、お孫さんの手を引いて来てくださったおばあさまは、製麺所がいつごろまで営業されていたかなど、当時の様子を話してくださいました。こうしたお客さまとの何気ないやりとりもまた楽しく、励みにもなりました。

現代アートに造詣がある人もない人もともに、そして老若男女を問わず楽しめる催しにすることは、街なかで開催するアートイベントの目標の一つであると思います。今回も三鷹駅前のライブペイントでは、子供たちが進んで参加してくれました。今後もTERATOTERA祭りが、街に愛され、幅広い方々に楽しんでいただけるイベントであり続けるよう願っています。

初めまして、TERACCO1年生

近藤康弘

右も左も分からない知らない街に引っ越して来た転校生のような気分。ワクワクドキドキとは少し違う、どちらかと言えば、不安や緊張といった、身構えて固い、相手を探るような視線で迎えた初登校の朝礼の気持ち。

今回の執筆にあたり、初めて「テラッコ屋」(ボランティアスタッフTERACCOの定例会議)に参加をさせていただいた時のことをぼんやりと振り返っております。いくつになっても、初めてはやっぱり緊張しますね!

2018年、「駅伝芸術祭」と「TERATOTERA祭り」に参加しました。それこそ、変に身構えていた自分がまったく無意味なくらい、あれよあれよという間に巻き込まれていきましたよ(笑)。

TERACCOの皆さんは、関わり方は本当にさまざまです。お客さんとして、スタッフとして、時には出演者(?)として。TERATOTERAは、アーティストの方との打ち合わせ・交渉、企画から運営、飲み会など、TERACCOが中心となり、活動をしています。

何だか距離って面白いなぁと思います。相手との距離、時間や場所との距離、建物や歴史との距離、自分との距離、自分自身の感情や思考ひとつで、地球の裏側の果ての果てまで行くこともできるし、自分や物事を俯瞰して見下ろすこともできる。どこまでも縮めることもできれば、どこまででも伸ばすことができる。そこには、絶対的に自分の知らない世界があって、まだ見ぬ人がいます。

今回、いきなりこんなに大きなイベントに、参加して間もない僕なんかで大丈夫かな、迷惑かけないかなと思っていたのも、自分自身が相手やその世界との距離を勝手に計っていたのではないだろうか?

年齢や経験、職業やおかれている環境、状況、当たり前にそのすべてが違うけれど、そこには知らないことが無数に転がっています。ときおり、テレビやネットで流れてくるニュースは、同じ日本国内でも、なぜだか遠くに感じられる。目の前を通り過ぎて行く人、同じ電車に乗っている人、その多くは名前も職業も知らない。でも、「何やっているんですか?」「何なんですか、これ?」という一言だけで相手との距離は急速に縮まる。

芸術という名の世界との距離もおなじなんだろう。正直、僕は芸術やアートをよく分かりません。けれども好きで、一人でも多くの方に見てもらいたい、触れてもらいたい、感じてもらいたい、と思っております。

TARATOTERAに関わっている、アーティストの方、TERACCOの皆さん、関係者の方々、すべての人が本当に楽しそうで、この世界が好きで、誰かと話をするのが好きで、お酒を飲むのが好きで、ここから何かが生まれて来るのだなぁ、と感じております。

2019年は、伸びたり縮んだり、ゆるく楽しんで関われたらいいなぁと。今年も、どうぞ、よろしくお願いいたします!

砂連尾理の街頭パフォーマンス『妊婦さんと踊る』で開催を宣言する

(上)「駅伝芸術祭」では、走者の安全を確保することがTERACCOの重要な役割だった
(左)ライブペインティングのために下地を塗る作業が夜まで続いた

空間のアンソロジー

長田千輝

が好きなわたしタチを喜ばせた。そもそも、その言葉に誘われてうつらうつらしているうちに迷い仔んだのであった。空間の群はどこまでも連なっているように思えた。

わたしは7軒目のカウンターで突っ伏して、芋焼酎のロックが水浸しになるのを夢見ている。いつも閉じているカーテン。ほんのりした間接照明。LE CHOCOLAT DE Hのチョコレート。おだやかな音楽。描きかけのカンバス。玄関で迎えるクリスマスのセット。キラキラした雰囲気。冬の空気。

暑中にいた。あほみたいに暑い。

誰かが山に囲まれた盆地に炎天を振りかけ、くそみたいな料理を作ろうとしているようだった。

その部屋にも繋がっている。夜と朝のあいだ、薄暗いゴールデン街にも。

幼いころから自分の世界に逃避するのが常だったわたしは、見かけの美しさを疑っていたせいで、アートとか美術だとか呼ばれるものとは縁遠いものだった。それに触れるまでは。

川沿いの道をしばらく走ると中央線上で空間群に出会った。人人は多様なのか規格化されているのか知らないけれど、そこでは誰も特別にみえた。それからみんなが移動し続ける空間のことを想う。

昨日、わたしは三鷹駅の周辺で馴染みのないイベントが行われているところに出喰わす。

田川に沿ってドライブをしていた。すこし焦げながらGIRL AT THE BUS STOPを永遠に聴いていた。すると夏の終わりの誰もいなくなっ

＊冒頭と末尾の文章が完結していませんが、筆者の表現です。原文のまま掲載しています。(編集部)
＊「空間」という言葉を関数に、その場の出来事をパスティーシュとしました。(筆者)

アートプロジェクトの123（オイッチニーサン） INTRODUCTION TO ART PROJECT

日時	2018年6月21日(木) ～ 2019年2月21日(木) 19:30 ～ 21:30　原則隔週木曜日　全18回(特別講座を含む)
会場	アーツカウンシル東京　ROOM302 ほか
コーディネーター	小川希
ゲスト	高嶺格、西野達、山城知佳子、福住廉、小林武史、藪前知子、木野哲也、国松希根太、奈良美智、佐塚真啓、羊屋白玉、矢内原美邦
Date	2018.6.21（Thu）～ 2019.2.21（Thu）
Venue	Arts Council Tokyo ROOM302
Coordinator	Nozomu Ogawa
Guests	Tadasu Takamine, Tatzu Nishi, Chikako Yamashiro, Ren Fukuzumi, Takeshi Kobayashi, Tomoko Yabumae, Tetsuya Kino, Kineta Kunimatsu, Yoshitomo Nara, Masahiro Satsuka, Shirotama Hitsujiya, Mikuni Yanaihara

アートの歴史から現場での実体験まで 充実の「基礎講座」

近年、日本全国で大小さまざまなアートプロジェクトが開催されているが、そもそもアートプロジェクトは何のためにあるのか、私たちの生活に必要なものなのだろうか。そんな疑問に応えるために開催された講座が「アートプロジェクトの0123」。アートプロジェクトがもつ可能性や意義を問い直し、私たちに必要なアートプロジェクトをつくりあげるための知識や技術を獲得することを目指した。アートの歴史や現状を学ぶレクチャーから、第一線で活躍するアーティストやプロデューサーの話、また文章を書くためのノウハウから現場での実体験まで、多岐にわたる内容の一部を紹介する。

From Art History to Onsite Experiences: A Robust "Fundamental Lectures"

In recent years, there have been a large number of “art projects,” large and small, across Japan. But what is their purpose? Are they at all necessary for our lives? ART PROJECT 0123 was a lecture series designed specifically to address this issue. By reconsidering the possibilities and meaning of art projects, we aimed to acquire the knowledge and techniques needed for producing art projects that are essential to us. Presented here a sampling of the wide-ranging content of this series, including lectures outlining the history and current state of art, talks by artists and producers working on the frontline, lessons about how to write texts, and firsthand reports of organizers’ and participants’ experiences.

第3回　ゲスト：高嶺格

現代美術は状況に「積極的に」影響する

高嶺格の作品は映像インスタレーション、写真、彫刻のほか、舞台作品など、多岐にわたる。それは、スタイルを持たないことを（自らに）課しているから、という。「その状況、文脈、空間、時間の流れ、人材がいて、一番大事なことは何をそこでやったら良いのか、どういう効果をもたらしたら成功と言えるのか、ということをかなり意識しながら作る」。そう語る高嶺は、教室を見渡しつつ、この講座でも「何を伝えるか」に考えを巡らせながら講義を進めていったようだ。

高嶺にとって現代美術は「現代の状況に『積極的に』影響を与えたいと思っているもの。何であれ影響は与えてしまうものだけど、現代美術はそれを意図して現代という時代と絡む意思を持っている」と語った。そのような考えの中で、高嶺にとっての作品制作は「美術や芸術、アートだとか言われている、その領域を広げていくこと」。自分の結婚式を作品化した『在日の恋人』では、「そんなベタな題材で作品にできるのか、というチャレンジをすることへの興味があった」という。

高嶺によって拡張された現代美術の世界は、予想を超える広がりで受講者を驚かせた。

第4回　ゲスト：西野達

既存の認識を180度変えるインスタレーション

西野達は、国内外で大規模なインスタレーションを多数発表しているアーティスト。2011年のシンガポール・ビエンナーレでは、同国のシンボルとも言える「マーライオン」を室内に取り込んだホテルのインスタレーションで観客を驚かせた。

「アートは、普段見ているものの違う面を見せることができる」と西野は語る。その言葉通り、西野はパブリックな設置物（例えば銅像や街路灯）を部屋の中に取り込んで、パーソナルなインテリアに変換するなど、見る者の既存の認識を180度変えてしまう。

そうした作品のなかで、西野自身にも衝撃的だったのが『驚くこともあれば、そうでない時もある』（2006年）。美術館内に一般家庭の部屋を出現させ、台所横の壁にピカソの『青い肩掛けの女』を掛けたインスタレーション作品だ。制作するまでは「いつ、どんなときもピカソの作品は輝いて、素晴らしい」と思っていたが、実際には違った。「貧乏くさい部屋に飾られたピカソの絵はオーラがなくなってしまった」と、制作過程で自身の認識にも変化があったことを語った。

「西野達にしかできないものしかやらない、他の誰かが考えつくものはやらない」と力強く語る西野。その作品について初期から現在まで、作家自身に解説を聞くことができる貴重な機会となった。

第7回　ゲスト：山城知佳子

切迫した笑いの解剖

映像作家・山城知佳子は「沖縄戦の継承は可能か?」という、戦争を経験していない世代への問いに、取材のなかで多くの死者の不在を思う独自の方法論を探り当てた。その経験を語りつつ、現場での即応力が作品を強くするなど、創作の秘密を、ふんだんな作品上映を交えて明らかにした。

しかし何より、長く封印していたという『Girls Riding Horses』や『OKINAWA墓庭クラブ』など、沖縄独特の広い墓庭の前で、コミカルなパフォーマンスを淡々と続ける初期作品を、詳しい解説つきで見られたのは貴重だ。

山城は「だんだんシリアスになってゆく私の作品のなかでユーモアは重要」と語る。米軍基地敷地内の黙認耕作地にある闇市で、肉をめぐって幻想と現実が交錯する『肉屋の女』。沖縄と韓国の済州島を舞台に、戦争と民衆のかかわりを寓話的に描き、国際的な評価を得た『土の人』。そうした深刻なテーマの近作にも、必ずどこかクスリと笑いを誘うようなディテールが紛れ込んでいて、不思議な風合いを生む。

切迫した状況で沸き起こる滑稽。山城作品は常にユーモアとともにある。その笑いの筋繊維を解剖してみせてもらったような得難い講義だった。

特別講座　ゲスト：小林武史

音楽家がアートに期待するもの

小林武史は2017年夏、宮城県石巻市で「Reborn Art Festival 2017」を主宰した。プログラムには音楽フェスも組み込まれていたが、本格的なアートプロジェクトと評された。高名な音楽プロデューサーの小林があえてアートプロジェクトを手がけた理由が、受講者の関心の的だった。

持続可能な社会を目指す「ap bank」の活動にもかかわる小林は「短期的に盛り上がる音楽イベントとは違って、社会に対してもっと長いスパン、深い角度から向かい合いうるアートは以前から気になっていた」という。

そこに2011年の東日本大震災と原発事故。その後の被災地の状況に対して「アートを使って何かできないか」と模索してきた。当初は2015年ごろを想定していたが、被災地には配慮すべきセンシティブな問題が多く、さらに時間をかけて開催にこぎつけた。「被災地は多くのものを失ったが、失ったからこそ出会うものがある」という信念を持って臨んだ。

今年夏には第2回を開催する。「僕ら人間は自然の一部でありながら、自我を異様なまでに肥大させている。このままでは人間不在の未来を招きかねない。それに歯止めをかけたい」と熱を込めて語った。後日発表された第2回のコンセプトは「いのちのてざわり」だった。

第13回　ゲスト：木野哲也、国松希根太、奈良美智

それは森づくりから始まった

木野哲也

「飛生（とびう）芸術祭」は北海道白老町の飛生集落で2009年から続いている。きっかけは、地元出身で札幌市在住の彫刻家・国松希根太が廃校になった小学校にアトリエを構えたこと。札幌でイベント企画を手がける友人・木野哲也が協力し、1日だけ、夕方から夜にかけての小さなイベントとしてスタートした。

2011年からは小学校の裏の放置林を整備する「飛生の森づくり」、その森で一夜を過ごす「TOBIU CAMP」も始めた。「土地の歴史や文化、地勢など有形無形の資源を学び、住民と交流を重ねながらアートプロジェクトを続けてきた」（木野）。

国松希根太

その活動、とくに森づくりに関心を持ったのが美術家の奈良美智だった。2016年3月、北海道新幹線が開通した際に飛生を訪問。その秋の芸術祭から参加するようになった。

翌年は「開幕1ヵ月前から飛生に住み込んで、地域と仲良くなった」。一般的な芸術祭は、外部から作家がやってきて作品を見せて帰っていく。そうしたあり方に違和感を覚えて、2018年は自分を見せるのではなく、地元の子供たちの絵を発表する木工のステージを手作りした。ところが、開幕2日前に北海道胆振東部地震が発生。芸術祭は中止になったが、奈良が提案した「熟女バー」は開店。かつての校舎で、地元の人々が未明まで楽しげに歌い踊る映像が紹介され、地域に根ざした芸術祭のあり方をうかがわせた。

そうした映像記録を振り返りながら、奈良は「俺の3分の1は美術をやろうとしているけど、3分の2は普通に生きたいと思っている。そのきっかけが飛生にある気がする。出会えてよかった」と語った。

奈良美智

講座内容

第1回　6月21日　**イントロダクション**

第2回　7月5日　**コンセプチュアルアート1**
マルセル・デュシャンを祖とするコンセプチュアルアートの歴史は、現代美術の歴史そのものといっても過言ではない。その基本をおさえることからスタート。

第3回　7月19日　**コンセプチュアルアート2**　**ゲスト講師：高嶺格（美術家、演出家）**
映像インスタレーション、写真、彫刻のほか、舞台作品も手がける高嶺格をゲストに迎え、作品や活動について聞いた。

第4回　8月2日　**インスタレーション1**　**ゲスト講師：西野達（アーティスト）**
シンガポールのシンボルとも言えるマーライオンを室内に取り込んだホテルなど、大規模なインスタレーションを多数発表している西野達。屋内外でのプロジェクトの現状や可能性について語ってもらった。

第5回　8月23日　**インスタレーション2**
現代のアートプロジェクトで多く登場するインスタレーション。歴史的にどのような試みが行われたのかを学んだ。

第6回　9月6日　**映像表現1**
現代の美術シーンにおいて、映像表現の多様さを見逃すことはできない。映像表現がこれまで何を問題とし、どんな実験を重ねてきたのかを詳察した。

第7回　10月26日　**映像表現2**　**ゲスト講師：山城知佳子（アーティスト、映像作家）**
地域の歴史や人々の営みを起点に映像作品を制作・発表している山城知佳子を迎え、映像というメディアを用いた表現について語ってもらった。　＊第7回は9月27日開催の予定だったが、台風のため10月26日開催に変更した。

第8回　10月4日　**作品評論の作法を学び、評論を行う1**　**ゲスト講師：福住廉（美術評論家）**
気鋭の美術批評家・福住廉をゲストに迎え、展覧会や作品についての基本的な文章の書き方、読む人への伝え方をレクチャーしてもらった。展覧会の感想文が次回への課題となった。

第9回　10月18日　**作品評論の作法を学び、評論を行う2**　**ゲスト講師：福住廉（美術評論家）**
事前に提出した展覧会の感想文を講師が添削。その文章を例に、良い点や改善点を話し合った。各自リライトし、次回の講義までに提出することが課題にされた。

第10回　11月8日　**作品評論の作法を学び、評論を行う3**　**ゲスト講師：福住廉（美術評論家）**
講師に最終確認してもらった文章を受け取り、最終版を受講生同士で読み合った。互いの文章を俯瞰してみることを経験をした。

第11回　11月16日～ 18日のいずれか1日以上　**アートプロジェクトの現場を見る**
複数組のアーティストが参加する「TERATOTERA祭り2018」にボランティアスタッフとして参加し、運営側の動きや、アーティストの作品制作の過程を体感した。

「特別講座」　11月29日　**ゲスト講師：小林武史（音楽プロデューサー）**
本講座をより多くの人に知ってもらうために、受講生でなくても参加できる特別講座を開講。ゲスト講師の小林武史は2017年、宮城県石巻市で「アート×音楽×食を彩る祭り」をテーマとした「Reborn-Art Festival」を主宰した。音楽プロデューサーとしてアートプロジェクトに取り組んだ経験を語ってもらった。

第12回　12月13日　**キュレーターの活動を知る**　**ゲスト講師：藪前知子（東京都現代美術館〈MOT〉学芸員）**
ゲスト講師の藪前知子は、清澄白河エリアで開催した「MOTサテライ2017 春 往来往来」を手がけ、「札幌国際芸術祭2017」にも企画メンバーとして参加した。その経験から、キュレーターとしてのアートプロジェクトへの関わり方について語ってもらった。

第13回　12月27日　**ディレクターの活動を知る1**　**ゲスト講師：木野哲也（TOBIU CAMP代表）、国松希根太（彫刻家、飛生アートコミュニティー代表）、奈良美智（美術家）**
北海道白老町で「飛生芸術祭」を手がける木野哲也、国松希根太と、2016年から同芸術祭に関わっている奈良美智を招き、芸術祭の現場について聞いた。

第14回　1月10日　**プロデューサーの活動を知る**　**ゲスト講師：佐塚真啓（アーティスト、国立奥多摩美術館館長）**
佐塚真啓は2012年、東京都青梅市でアトリエとして使用している旧製材所を「国立奥多摩美術館」として開館し、展覧会を不定期で開催している。その活動について語ってもらった。

第15回　1月24日　**ディレクターの活動を知る2**　**ゲスト講師：羊屋白玉（劇作家、演出家、俳優）、矢内原美邦（振付家、演出家、劇作家）**
ゲスト講師はともに演劇界で活動する羊屋白玉と矢内原美邦。アジア諸国の舞台芸術に関わる人々とのネットワークづくりや、それを起点にした作品作りなどをしているアジア女性舞台芸術会議実行委員会の活動について聞いた。

第16回　2月7日　**受講生によるアートプロジェクトの企画発表1**

第17回　2月21日　**受講生によるアートプロジェクトの企画発表2**

VISITOR QUESTIONNAIRE 来場者アンケート

TERATOTERAはイベントの来場者を対象にアンケートを実施しています。その結果は、今後の広報や活動に生かしていきます。また、中央線沿線という幅広い年齢層がさまざまなカルチャーに触れているエリアの声を収集することは、TERATOTERAだけではなく、その他アートプロジェクトにとっても参考になると考えます。アンケートには193人が回答しました。

Q1 性別

例年女性の割合が高いですが、今年度は全イベントをとおして男女比のバランスが取れ、ほぼ半々でした。

Q2 年代

例年どおり20代〜30代の比率が高いですが、今年度は40代以上の来場者の占める割合が前年度に比べ増えました。40代以上の来場者は置きチラシをご覧になって、初めてTERATOTERAのイベントに参加された方が多くいらっしゃいました。今年度のTERATOTERAの各イベントのテーマ設定が40代以上の方の興味を引いたと思われます。

Q3 本イベントは何を通じて知りましたか。

SNSから情報を得る方が大半を占めていますが、チラシという紙媒体を手に取っていただく機会も多いことがわかりました。一度に大勢の方に目に触れるSNSをとおして行う告知だけでなく、イベント会場の周辺の協力施設や地域の商店会にチラシを置いていただくことで、地元の方がご興味を持っていただく結果となりました。 また、TERATOTERA祭りでは街なかでイベントを開催しているということもあり、通りすがりの方の目に触れる機会も多くあり、興味を持っていただき会場に足を運んでいただけました。

Q4 TERATOTERAの参加回数

今年度は今までに比べ、リピーター率が高い結果となりました。今年の参加アーティストは今までTERATOTERAのイベントに参加された方も多く、再度そのアーティストの作品を見に足を運んでくださる方が多くいた結果と考えられます。

Q5 参加してみたいアートイベント

参加してみたいアートイベントとしてパフォーマンス、展示が多く上げられました。その次に音楽ライブ、トークという結果になりました。今年度のTERATOTERAでは展示、パフォーマンス、ワークショップを行いましたが、今後は参加者のご意見を参考にし、音楽イベントやトーク企画などを打ち出していきたいと思います。

来場者の声

新しいものを見れて刺激的だった。 …… （30代男性）
もう少し映像作品の比率を下げてほしい。 …… （40代男性）
いろんな形の作品があって楽しめただけでなく、一つのテーマも見えてきたような感じがしたから。 …… （10代男性）
若い芸術家のエネルギーを感じて楽しかった。 …… （70代以上女性）
とても楽しめた。映像作品が特に興味深かった。 …… （30代女性）
あまりない体験ができた。 …… （30代女性）
見たかった作家さんの作品も良かったが期待以上。 …… （50代男性）
こんなところでしっかりした展示が見れるなんて面白い。 …… （30代女性）
長尺の映像作品が多く、まだすべて見きれていないため、また来ます。 …… （20代男性）
作家のセレクションも楽しい、以前からずっと参加したかったので、見に来れて満足。 …… （50代女性）
案内が分かり易かった、内容が面白かった。 …… （30代男性）

EPILOGUE

おわりに

世界で一番、大切なもの、その未来に

世界で一番、大切なものができた。2018年11月に、わたしは男の子を出産した。わたしの産休中、TERATOTERAを支えてくれたのは、TERACCO（テラッコ）と呼ばれるボランティアが主体となり、アートイベントの運営業務を担うべく今年度より始動した「Teraccollective（テラッコレクティブ）」のメンバーたちだ。膨大な事務作業から、アーティストの突飛な要望への対応まで、企画を実現し、記録に残すまでのすべてを担ってくれた。

毎年度ディレクターが提示してきた「TERATOTERA祭り」のコンセプトも、20代から60代の16名のメンバー全員で考案することとなった。そこでメンバーが口々に語ったのは、多くの不安。貧困、ジェンダーに対する偏見、障害、政治不安……。それぞれが抱える問題に、作品を通して一人でも多くの方に関心を持ってほしいという想いを胸に文案を練った。

世界で一番大切な息子が生きていく未来には、多くの問題が渦巻いている。強く生きてほしいと願うが、強くなくては生きられない社会にはなってほしくない。芸術を通してできることを、今後も微力ながら考え続けていきたいと思う。

今年度は、産休に入ってしまい最後まで見届けることのできない企画もあった。その中でご協力いただいた地域の皆さま、そして企画を実現してくれたTERACCO一人ひとりに、心からの感謝を送ります。

TERACCOがコレクティブとして新たな一歩を踏み出したTERATOTERAに、今後も楽しく関わり続けていただけたらこれ以上嬉しいことはありません。

TERATOTERA事務局長
高村瑞世

The Most Important Thing in the World: In the Name of Its Future

The most important thing in the world has happened. In November 2018, I gave birth to a child, a boy. While I was pregnant, the volunteer group Teraccollective stepped up to oversee TERATOTERA. Made up of volunteers, Teraccollective was created this past year to manage business operations for our art events, Teraccollective was responsible for everything, from the massive administrative work and fielding artists' extravagant requests, to ensuring that plans were successfully brought to completion and that events were properly documented.

Even the concept advanced by our director for TERATOTERA Festival 2018 was fleshed out by all sixteen members of Teraccollective, who range in age from their twenties to their sixties. During those discussions, many concerns were voiced: poverty, gender biases, physical handicaps, political uncertainties, et cetera. So that as many visitors as possible would become interested in these issues through the exhibited artworks, Teraccollective members carefully crafted the words that sprung from their heart.

My son will grow up in a future that is bound to be engulfed in problems. While I hope that he will have the strength to thrive, I also hope that our society will not become one in which only the strong can do so. What can be done through art? Perhaps little, but this is a question that I would like to continue thinking about.

This year, as I had to take maternity leave, there were a number of projects I was unable to see to fruition. To the residents of the communities where these projects took place, and to each and every member of Teraccollective and other volunteers who ensured these projects' successful completion, I express my heartfelt gratitude. Nothing would bring me greater happiness than the pleasure of continuing to work with TERATOTERA, which is taking new strides forward thanks to the Teraccollective.

Chief of Operations, TERATOTERA
Mizuyo Takamura

[ディレクター]　小川希

[事務局長]　高村瑞世

[事務局スタッフ]　飯川恭子、津賀恵、森ゆうな

[Teraccollective]
※「TERATOTERA祭り」の企画・運営
飯川恭子、岩尾庄一郎、小川希、加藤惟、佐藤卓也、高村瑞世、立山周一郎、千葉佐奈子、都賀田一馬、遠山尚江、西岡一正、前川順子、三浦留美、森ゆうな、山上祐介、吉田絵美

[記録]
※各イベントのビデオ・写真撮影、記録冊子の掲載情報管理
西岡一正（監修）、高野裕二、山上祐介

[踊り念仏]
※アーティストとの調整、当日運営補助・管理
浪江航一（企画者）、岩尾庄一郎、国広綾子、高野裕二、立山周一郎、都賀田一馬、遠山尚江、西岡一正、林真実、三浦留美、山上祐介

[駅伝芸術祭]
※アーティストとの作品プラン調整、作品制作補助、当日運営補助・管理
iwaosho（企画者）、飯川恭子、石水典子、上田和耀、長田千輝、国広綾子、近藤康弘、佐藤有紗、佐藤卓也、周山祐未、高野裕二、立山周一郎、千葉佐奈子、津賀恵、都賀田一馬、遠山尚江、永野千晴、浪江航一、西岡一正、野村佳代、林真実、裴潤心、前川順子、三浦留美、宮﨑有里、目黒由利恵、森ゆうな、柳本紀子、山上祐介、吉野睦美

[TERATOTERA祭り]
※作品制作補助、当日運営補助・管理
石水典子、上田和耀、長田千輝、国広綾子、近藤康弘、佐藤有紗、周山祐未、永野千晴、浪江航一、野村佳代、林真実、裴潤心、宮﨑有里、目黒由利恵、柳本紀子、吉野睦美

[TERATOTERA祭り当日ボランティアスタッフ]
秋山きらら、植田かほる、小出有華、小林崇諭、阪口あい、鷹野 健、田口美穂子、根木一子、畑中 修、花崎美智子、濱野夏帆、平田陽子、廣安ゆきみ、堀江和真、本間順子、松本佳奈、道谷明里、吉末真由美、吉村由歌

ISBN978-4-909894-02-1

TERATOTERA DOCUMENT 2018

監修　小川希
編集　西岡一正
デザイン　トール至美
写真・映像　相子貴浩
阪中隆文
高野裕二
翻訳　Ryan Holmberg ライアン・ホームバーグ
吉﨑ゆきえ
主催　東京都
アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）
一般社団法人Ongoing
後援　三鷹市
武蔵野市
協力　株式会社ビデオインフォメーションセンター
株式会社まちづくり三鷹
公益財団法人 武蔵野文化事業団
JR三鷹駅
スペースエルベ
HYM（ハモニカ横丁ミタカ）
ビリヤード山崎
武蔵野タワーズ団地管理組合
UR都市機構（独立行政法人都市再生機構）
発行　平成31年3月19日
アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）
〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28
九段ファーストプレイス8階
Tel：03-6256-8435/Fax：03-6256-8829
問合せ　一般社団法人Ongoing
〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-8-7
Tel/Fax：0422-26-8454
Email：info@teratotera.jp
http://teratotera.jp

東京アートポイント計画は、地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて、東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、東京都とアーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）が展開している事業です。街なかにあるさまざまな地域資源を結ぶアートプロジェクトを、アーティストと市民が協働して実施・展開することで、継続的な活動を可能にするプラットフォームを形成し、地域社会の担い手となるNPOを育成します。
https://www.artscouncil-tokyo.jp/

ARTS
COUNCIL
TOKYO